新連載・理事長登壇 ①

日本ハンドボール界にはいったい何人の「理事長」がいるだろう。

総帥ともいうべき日本協会・荒川清美理事長をはじめ47都道府県協会、5加盟団体だけでも50人をこす。その下部を含めればおそらく200人近くになるのではなかろうか。

組織の大小にかかわらず理事長のポストほど気疲れするものはない、といわれる。

しかし、理事長の情熱なくして球界の発展はあり得ない。

そこで本誌では、日本協会の糸と直接結ばれていない組織や団体の理事長を中心に、彼らのかかえる課題と日本ハンドボール界への直言を時にはインタビューで、時には寄稿を求めて大いに論じてもらおうと思う。

トップバッターは、関東学連理事長・滝口三郎氏（明治大OB）＝写真＝につとめてもらった——。

――学生界のレベルダウンがささやかれているが

滝口理事長　私もレベルは落ちていると思う。あまりにも選手層が薄い。今年はまだよいが、有力選手が卒業する来年ははっきりいってピンチだ。

――何が原因だろう

滝口氏　入学難で優秀な高校選手が思うように集まらない。これが学生スポーツの姿だといってしまえばそれまでだが、内容的な不満は否めない。このままでは実業団との差は拡がるばかりです。

――何か打つ手を考えているか

滝口氏　中学や高校とちがって合同講習会といったものを開きにくいだけに、各校の監督やOBが持ち駒を訓れんし、強化していくしかない。しかし、あまり激しい練習や義務づけをすると退部してしまうという風潮にも頭を痛めている。

有力実業団と上位校の交流大会を考えたこともあるが、リーグ（連盟）の運営に追われ手をつけぬままだ。

――リーグ運営の問題点は

滝口氏　会場を土、日曜に確保しにくくなったことだ。ウイークデーだとレフェリーの依頼が難しい。収入もあがらない。

すべての面でマンネリ化しているのも課題だ。入れ替え戦を2校づつで行うとか、各部独立採算システムを採ることも考えようかと思う。また、特定カードの運営を地方協会に委せるのもいいだろう

――明かるい材料は一つもないのだろうか。

滝口氏　ニュアンスは違うかも知れないが、昨秋、中央が日体に代わって王座についたのは高く評価してよい。日体の奮起をよび、法政や早稲田にハリが出てリーグの上位戦を面白くしている。

――上位と下位の差がはっきりしすぎてはいないか。

滝口氏　一部6校説や4校による2回総当り案もたまにささやかれるが、今は下位校のカムバックを望んで待つ段階だろう。

女子も日体の天下がつづきすぎている。日体の努力は大いに買うが、他の学校がもう少し頑張ってくれると面白くなる。

――リーグ繁栄には何が必要か

滝口氏　よい意味でのスターを一人でもよけいにつくりたい。つまり高校生に「あの選手のシュートを見たい」と思わせるようなプレイヤーの輩出だ。そのためには有力新人が大学の門をくぐらなければいけないのだが……。

――日本協会に注文は

滝口氏　オリンピック前後の対抗試合や報告試合を東京で行わなかったのは考えものだ。こういうゲームを開けば学生界にも刺激となる。ジュニアナショナルの編成なども公式に通知して欲しい。選手たちへPRすれば励みになる。

――ミュンヘンの成績をどう考えるか。反響は?

滝口氏　春よりも入場者が減っているのは一つの余波かもしれない。選手たちは極めて冷静に受けとめているのではないか。

若い感覚を盛りこんだ長期的な強化計画で臨まぬ限り、オリンピックや世界選手権で上位に入るのは難しいように感じる。

（10月15日・駒沢屋内球技場で）



関東学生連盟理事長
滝口三郎さん
（明大OB）

「ハンドボール」11月号（第103号）目次

【表紙写真】全日本男子実業団大会　大同―湧永戦、大同・松原のシュート（毎日新聞社提供）

頂点強化「8年計画」など検討

ミュンヘンの経験、新出発点に

全国理事会

日本協会全国理事会は10月15日午前10時から東京・岸記念体育会館に田村会長、西、渡辺、徳永、林各副会長と荒川理事長ら20理事（定員35。委任状6、欠席8、欠員1）それに竹野全日本コーチがオブザーバーで出席して開かれた。

ミュンヘン後初の全国会議とあってその成り行きが注目されていたが、田村会長は「ミュンヘンオリンピックでの経験を活かしてこの大会を新しい斯界の出発点としたい。これまでの全国の協力体制に改めて感謝するとともに今後いっそうの団結をはかりたい」と述べた。また荒川理事長は「全国の期待である上位入賞を果せなかったのは残念だが、日本代表は全力をつくした。オリンピック一本にしぼった施策に対しては責任を感じている」と発言。

特に結論は出されなかったものの、ミュンヘン大会を次のスタート台にして、より充実した頂点活動と普及活動を展開していくことに理事会の空気はまとめあがった感じである。

今回の会議の焦点はミュンヘンオリンピックの報告と今後の頂点普及対策であった。

全国の期待を一身に集め、上位入賞を目標として打ち出したミュンヘンだが、結果は「11位」で終わり、一部に失望のムードが流れているのはかくせない事実である。

しかし、日本代表チームの現在の力倆からすれば、むしろこの成績は「精いっぱい」「順当」とする評価もあり、荒川、村田、竹野各氏から報告をうけたあとの質疑も、回顧より「いかにしたら勝てるか」という今後の対策をめぐる論議が主軸におかれて、活発な意見がかわされた。

その結果、戦術面、体力面、情報面などで諸国との間に一気につめることのできないほど大きな差があり「長期的な一貫した強化対策をとり4年後などといわずむしろ8年後を目指して計画をたてるべきだ」（石切山理事）との発言を検討材料として残し、早急に新しい強化路線をととのえることに決めた。

中学大会参加校増加を要望

また、頂点強化と併行して普及対策についても多くの意見が出され、特にクラブに目標がないことから「国体をクラブだけに限定した大会とすべきだ」という声がかつてないほど強く注目された。

中学大会に関しては地域選出理事の大半が「参加校数の増加」を要望した。

この2点に対し、荒川理事長は「国体をクラブだけのものとし、実業団などを締めだすことは簡単にできない。昭和50年から国体参加資格が大幅に変更されるのでその機をとらえて検討したい。中学大会の参加校を増やすことは日本協会の財源、受け入れ地の条件などもからんでくる」と答えた。クラブについては協会財源から一般男女の減少という深刻な問題も忍び寄っており、執行部は善後策に頭を悩ましているが、肝心の「クラブ」の定義づけが、あまりにも多範囲にわたって画一しにくいため堂々めぐり、早急に一本の道を見つけ出すことは難しい現状である。

47年度収入千四百万円に

このほか、「47年度一般会計予算」の補正が行われ、総額一四、〇七八、九〇〇円の収入が見込まれていることが明きらかとなり、加盟金、登録金などの値上げでむしろチーム数が減り、実質的にはたいした収入増とならないのではないかという懸念は、一応とり除かれた。なお、機関誌会計の収入予算は四、七一一、六〇〇円である。

昨秋のオリンピックアジア地域予選の収支は一二、九六四、六六九円（記念品頒価二、六一一、七〇〇円を含む）の収入に対して支出が一六、五七九、二二五円と上廻り欠損となった。

当初の予算では一、五〇〇万円が見つもられていたものだが、東京大会の入場料収入とTV放送料広告料などで約百七十万円の収入減があり、一方、支出面は日本代表チーム経費などを一切加えた数字のためふくれ、三、六一四、五五六円の赤字がはじき出されたわけである。（注・46年度会計報告は全国評議員会承認後掲載します）

オリンピック対策部解散　日本協会は10月15日付でオリンピック対策部（村田部長ら4委員）を当初の予定どおり解散した。

女子ナショナル 垂水、牧野ら31選手決まる

このほか10月15日の全国理事会では選衡の遅れていた「47年度女子ナショナル」31名（GK6、FP25）が発表された。

このメンバーは技術指導部の選考によるもので国際経験、長身者、特異な技能の三点が重点とされ、多彩な顔ぶれとなった。

昨冬の世界選手権代表（46年度ナショナル）から引きつづいて選ばれているのは小原、北岡、垂水、米、島田、古佐原、牧野、三毛の8人だけで、女子の新陳代謝の激しさを物語っている。

今年5月韓国に遠征した実業団選抜軍14人のうち12人が選ばれているのは注目され、学生界から久々に5人が加えられているのと合わせて将来性も充分考えられた、とみてよいだろう。

さしあたって、国際試合を行う計画はないが来秋の世界選手権（別掲）代表選手はこのメンバーが主力となるものとみられ、各選手の今後の精進が期待される。

なお、世界選手権代表の選考については、今のところ12月の全日本総合選手権後に第1次候補選手（人数未定）を発表する予定でこのナショナルプレイヤー以外から加えられるケースもある模様。

アジア連盟、来年設立か

アジア連盟結成をふくめたアジア交流については、新たに国際ハンドボール連盟（IHF）理事となった渡辺和美副会長からIHF総会の報告を聞き同副会長は「アジア連盟はIHFが大陸連盟の規約をつくり、それに基いて結成される。今年内には規約が承認されると思う。私自身は来年に入ってなるべく早い時期に設立総会を開きたいと考えている」とつけ加えた。IHFに加盟している国は日本のほか韓国、台湾、イスラエル、レバノン、クウェートの計六ケ国だが日本—台湾、イスラエル—レバノンなど政治の流れが無視できぬ情勢もあり、アジア連盟の結成はかなり波乱含みとなろう。

このほか懸案の「全日本総合選手権開催基準要項」「日本協会規約の一部改正」が承認され、全国評議員会への上程が決まった。

全国高校優秀選手も決まる

日本協会と全国高体連ハンドボール部ではこのほど「昭和47年度全日本高校優秀選手」男女各15名を別表のように発表した。

いずれも3年生である。

48年度全国大会の日程内定

来年度の全国大会の日程は関係団体によって準備を急いでいるが現在までに内定した分は次のとおり。

▽沖縄特別国体高校女子トーナメント　5月4〜6日・コザ市

▽第5回全日本自衛隊選手権、5月・東京

▽昭和48年度全国実業団トーナメント　6月10〜13日・愛知県下（いずれも予定）

▽第20回NHK杯全日本選抜大会　6月・場所未定

▽第14回全日本実業団選手権男子の部　7月11〜15日・熊本、女子の部　7月上旬・岐阜

▽第24回全日本高校選手権　8月2〜7日・四日市市

▽第2回全国中学生大会　8月10〜15日の間・場所未定

▽第16回全日本教職員選手権　8月中旬・水海道市

▽第28回国体ハンドボール　10月14〜18日・佐原市

▽第25回全日本総合選手権　12月4〜9日または11〜16日・場所未定

（注）学生関係は一切未定。

沖縄特別国体の出場県

来年5月4日から沖縄県コザ市で開かれる沖縄特別国体のハンドボール競技は高校女子8チームによるトーナメントに決定したが、このほど出場県が次のように発表された。

福島、神奈川、長野、奈良、鳥取、熊本、大分、沖縄

東北選出理事に森恭一氏

東北協会は9月1日評議員会を開き、理事長に森恭一氏（36才、日体大出、宮城協会）を決め、発表した。

また、日本協会東北ブロック選出理事も佐藤敦氏（岩手協会）から森氏に変わり日本協会も承認した。

昭和47年度 女子ナショナルチーム名薄

GK（6名）
小原　名苗（大洋デパート）
北岡　千賀（愛知教員ク）
長岡　範子（東京重機工業）
佐藤　玲子（ブラザー工業）
和田　祥子（大崎電気）
大工原和子（日体大）

FP（25名）
垂水　秀代（大洋デパート）
米　恵美子（大洋デパート）
島田　夏枝（大洋デパート）
蔵田　照美（大洋デパート）
釼　あつ子（大洋デパート）
古佐原ひろ子（東京重機工業）
牧野　涼子（東京重機工業）
葛西　則子（東京重機工業）
市川　千晴（東京重機工業）
村上　朋美（東京重機工業）
三毛　直子（田村紡）
広森　和代（田村紡）
辻　敏子（田村紡）
蓮見二三恵（日本ビクター）
八重樫優子（日本ビクター）
谷沢　竜子（日本ビクター）
嶋田ひろみ（日体大）
赤塚千賀子（日体大）
木村　正子（日体大）
藤浪　泰子（ブラザー工業）
鳥居　君子（ブラザー工業）
佐藤あや子（大崎電気）
岩井　悦子（大崎電気）
伊賀かほる（東北ムネカタ）
垂正房万里子（甲子園短大）

昭和47年度 全日本高校優秀選手

▼男子（15名）

GK
小松伊佐夫（湯沢　180）
百々　邦夫（下関中央工　172）

FP
蒲生　晴明（中大付属　189）
佐藤　恭政（中大付属　178）
額賀　洋二（麻生　168）
仲田　成実（麻生　175）
上野　政則（小倉西　170）
辻　敏朗（小倉西　176）
佐藤　文男（湯沢　169）
大島　隆志（下関中央工　178）
梅林　広（清水商　179）
高橋　良輔（都島工　167）
西窪　勝広（隼人工　176）
卯野　秀樹（東根工　176）
塚辺　茂雄（仙台育英　175）

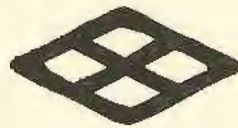
▼女子（15名）

GK
金井　厚美（深谷女　164）
粂谷　信子（国学院栃木　161）

FP
袰島　玲子（高蔵　165）
鷹江　里子（高蔵　158）
柴田　弘美（高蔵　150）
菅野　宏美（深谷女　164）
藤倉真由美（深谷女　164）
藤井　伸江（高水　164）
村岡久美子（高水　163）
鈴木　昌子（国学院栃木　168）
加藤美紀子（涌谷　162）
加藤　益子（和洋女　160）
鍋島恵美子（小松市女　163）
小森久里子（佐世保商　166）
根本けい子（麻生　153）

（右側の数字は身長cm）

合織糸・合織混紡糸



田村紡績株式会社

社長 田村正衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593―65―2156（代表）
郵便番号　512

男女世界選手権へ参加決定

微妙なイスラエルらの動向

日本協会は10月15日の全国理事会で来年11月21日から30日までユーゴで開かれる第5回世界女子選手権、49年2月28日から3月10日まで東ドイツで開かれる第8回世界男子7人制選手権にそれぞれ参加することを決め、女子についてはただちに手続きを完了した。

◇

日本が世界選手権へ出場するのはこれで男子が5回目、女子が4回目になるが、今回はこれまでといささか趣きを異にしている。

というのは、アジア地域にイスラエルへの転籍が正式に決まり（8月・国際ハンドボール連盟～IHF～総会）男女の国際舞台進出を企る同国と〃大陸予選〃を行う可能性が濃いからである。

これまで、男女通算7回の世界選手権参加を前にIHFから予選を義務づけられたのは第3回世界女子の際、チェコと対戦したケースがあるだけで、あとの6回はいずれもアジア大陸代表としてストレートに本大会への出場権が与えられていた。

これは、イスラエルがヨーロッパ地域で活動していたことと、韓国が〃世界〃へ食指をあまり動かさなかったためである。

消息通は、女子は今回もイスラエル、韓国とも出場意思がない、とみているが、エントリー締切り（10月30日）を終ってみないうちでの〃楽観〃はさけるべきだろう。もし予選が強いられるとその期限は来春4月15日までと決められている。準備は急を要すわけだ。

男子は、エントリーの中しこみが来春1月末なので、日本協会はそれまでに各国の動向を探る模様だが、「予選必至」という声が強い。

予選を行う場合、勝算という点では一応心配ないといえるが、遠征にしても、日本開催にしてもかなりの経費が必要で、特に遠征には日本体協から旅費補助がないのは大きい（注・本大会出場の場合は三分の二補助）。

この両国以外、クウェート、レバノン、台湾らが「世界選手権にまったく関心がない」と判断する早合点も許されまい。

世界選手権、オリンピックのたびに日本以外の国が参加の意思を示すと予選々々で追いまくられるわけで日本協会事業への影響も大きいものがある。

時評

日本協会の周辺はこのところもう一つハリがない。ミュンヘンを終わっていささか疲れが感じられるのは事実である。

日本ハンドボール界の目ざすものはオリンピックが総てではなく、本誌の「ミュンヘンの道」でもそれは繰り返し述べられて来た。

それでいながらなお、張り切った反応がこのところ乏しいのはやはりオリンピックというものの大きさ、魔術なのかも知れない。

どうしたら日本はヨーロッパの壁を破れるだろうか――ミュンヘンの反省が充分でないうちに、すでに次の目標が迫っている。女子の世界選手権まであとちょうど1年、男子の世界選手権まで1年4ケ月……。

どのような姿勢でこの両大会に臨むのか、執行部はアウトラインを引いただけで、なに一つ具体的な発表をしていない。

ミュンヘンを見学した人の話を総合すると、技術的にはかなりよい線に達しているが、上位を狙うにはあまりにも環境が違う感じだ、ということにまとまる。

この難問を解決するには全国理事会（別掲）でも話題となった長期計画以外になさそうだ。

仮にモントリオールの次――一九八〇年のオリンピックへ目標を置いた場合、選手の発掘、コーチングスタッフの年令などはおのずと逆算できよう。

すべての面で思い切った若返りが今こそ必要ではないか。

日本協会の体質そのものをこの際変える努力もしなくてはならない。

なかでも技術（頂点強化と普及対策）部門と運営部門をはっきりと分け、役員の職務を明確にすることとは急務だ。

日本協会事業は年ごとに巨大化、国際化している。旧態いぜんの感覚でいてはとても円滑な運営は望めまい。アマチュアの競技団体とはいえ〃企業意識〃に近いセンスももはや欠くことはできない。

球界の歴史も35年、多彩なOBのなかから適材適所の人材を探すのは難しいと思わぬ。一にぎりの人間が総ての面に顔を出すのではなく、じっくりと一つ道を究めるスペシャリストの養成、それに伴うプロジェクトチームの編成こそ「ミュンヘシ」で持ち帰って来た斯界の新しい活きかたではなかろうか。（X）

ホルル氏、常任理事にもれる

IHF新役員決定

大陸別理事の選出や大陸連盟結成など新時代を迎えようとする国際ハンドボール連盟（IHF）は8月末の第14回総会で新規約にともなう役員の改選を行った。

本誌既報のとおり会長にホグバーク氏（スウェーデン、前首席副会長）、常任理事選挙でワッドマーク氏（スウェーデン）がホルル氏（スイス、前技術委員長）を破ったのが注目される。

▽会長　ポール・ホグバーグ▽首席副会長　アルバート・デ・サンロマン（スペイン）▽次席副会長　ウラドミール・クリプシフ（ソビエト）▽事務総長（理事長）　マックス・リンケンバーガー▽財務　フレットスルント・ペダーソン（デンマーク）▽行事委員長　カート・ワッドマーク（＝以上常任理事）▽審判・規則委員長　E・ホルル▽トレーナー委員会委員長　I・クンスト（ルーマニア）▽広報普及委員長　B・ティエレ（西ドイツ）▽医事委員会委員長　I・マダラジィ（ハンガリー）▽理事　M・ハーマン（東ドイツ）、レオポルト（オーストリア）、渡辺和美（日本）、M・ファダリ（エジプト）、P・プヘニング（アメリカ）▽会計監査　ボルグ（スウェーデン）

熊本（大洋デパート・高校選抜）女子で完勝　教員は鹿児島

大阪（湧永薬品）埼玉（大崎電気）破り一般男子制す

鹿児島国体

第27回国民体育大会ハンドボール競技は10月23日から27日までの5日間鹿児島県隼人町に34都道府県から5部門71チームが参加して行われた。

南国の秋の陽をいっぱいにうけて各部門とも好試合がつづいたが注目の一般男子は予想どおり実業団で固めた各県の争いから大阪が3連勝、同女子は無敵・大洋デパートの熊本が東京、愛知らライバルの善戦を退け5連勝7度目の栄冠を握った。

激戦、波乱が連続したのは高校部門。男子は福岡が延長の末、仙台育英単独の宮城を降し初優勝、女子は熊本が鹿児島を制し4年ぶり7度目の優勝をとげ、熊本県は女子二冠を手にした。

教員は地元・鹿児島が波にのった攻守で強豪を連破、決勝でも2連勝を目指す兵庫をかわして熱狂裡に初優勝した。

得点争いは全部門に入賞した鹿児島県が天皇杯1位となり、皇后杯は熊本県が断然たる強味で3連勝を遂げた。

高校男子（10チーム）

▽1回戦（2試合）
奈良（選抜）12（6—5, 6—4）9 北海道（函館有斗）
静岡（選抜）15（11—5, 4—9）14 茨城（選抜）

▽準々決勝
宮城（仙台育英）16（8—5, 8—4）9 奈良
鹿児島（選抜）13（6—3, 7—6）9 愛媛（新居浜工）
福岡（選抜）12（5—4, 7—6）10 静岡
山口（下関中央工）19（10—3, 9—9）12 富山（選抜）

▽準決勝
福岡 14（8—8, 3—3 : 1—0, 2—0）11 山口
宮城 15（8—4, 7—10）14 鹿児島

▽3位決定戦
山口 11（6—5, 5—5）10 鹿児島

▽決勝

福岡、延長で宮城を破る

福岡 18（7—8, 8—7 : 1—1, 2—1）17 宮城

【宮城】	得
GK 平山	0
GK 門脇	0
FP 鈴木	1
相原	1
佐藤	2
塚辺	7
千葉	4
嶺岸	0
佐々木	2
新井	0
安藤	0
計	17

得	【福岡・選抜】
0	GK 大重（小倉工）
0	GK 鈴木（西南）
0	FP 桜木（小倉西）
2	西村（小倉工）
0	坂本（小倉西）
2	上野（小倉西）
0	梶野（若松）
4	辻（小倉西）
0	酒井（小倉工）
0	八尋（香椎）
10	山口（香椎）

18　（2）　7MT　（4）　17

高校女子（11チーム）

▽1回戦（3試合）
宮城（涌谷）8（3—4, 5—2）6 静岡（選抜）
熊本（選抜）8（3—1, 3—5 : 1—1, 1—0）7 石川（小松市女）
兵庫（選抜）8（5—2, 3—4）6 神奈川（選抜）

▽準々決勝
宮城 8（6—4, 2—3）7 沖縄（選抜）
香川（三本松）8（5—3, 3—2）5 兵庫
熊本 10（5—5, 5—2）7 広島（選抜）
鹿児島（選抜）17（10—3, 7—4）7 北海道（函館女商）

▽準決勝
熊本 9（5—2, 4—3）5 宮城
鹿児島 10（6—3, 4—4）7 香川

▽3位決定戦
香川 5（3—1, 2—3）4 宮城

▽決勝

鹿児島、決勝で涙のむ

熊本 10（6—5, 4—1）6 鹿児島

【鹿児島・選抜】	得
GK 大村（財部）	0
GK 福重（国分実）	0
FP 川路（財部）	0
岩元（国分実）	0
上川（財部）	1
中西（財部）	3
内田（財部）	0
郷田（財部）	0
戸越（財部）	0
豊田（財部）	2
森（加治木）	0

得	【熊本・選抜】
0	GK 佐田（熊本女商）
0	GK 丸山（熊本女商）
0	FP 水口（天草）
1	根岸（熊本女商）
4	矢田（熊本市立）
0	吉村（天草）
0	中原（熊本女商）
4	上野（熊本女商）
0	小北（熊本市立）
0	堀内（熊本市立）
1	畑田（熊本女商）

10　（1）　7MT　（0）　6

教員（10チーム）

兵庫の2連勝成らず

▽1回戦（2試合）
岩手（岩手教員）20（11—7, 9—9）16 福岡（福岡教員）

香川（香川教員）15（4―6、11―8）14 北海道（北海道教員団）

▽準々決勝

埼玉（埼玉教員ク）23（14―6、9―8）14 岐阜（岐阜教員）

兵庫（スワロー兵庫）28（14―9、14―10）19 岩手

鹿児島（鹿児島教員団）37（17―8、20―11）19 香川

福井（福井教員）22（13―12、9―7）19 山口（山口教員団）

▽準決勝

兵庫 24（16―8、8―5）13 福井

鹿児島 16（2―2、1―0：8―7、5―6）15 埼玉

▽3位決定戦

埼玉 28（18―9、10―5）14 福井

▽決勝

鹿児島 14（7―8、7―4）12 兵庫

【兵庫】	得		【鹿児】	得
上野	0	GK	海江田	・
泉	0	GK	山口	0
北山	0	FP	東屋敷	0
栗山	0	FP	平山	5
浜野	0	FP	田上	2
井上	3	FP	山並	0
畑	3	FP	中原	0
木野	1	FP	川添	3
藤埼	0	FP	赤塚	0
黒田	5	FP	馬場口	1
幸田	0	FP	尾上	2

14（2）7MT（1）12

愛知（ブラザー工業）善戦及ばず

一般女子（11チーム）

▽1回戦（3試合）

大阪（大谷ク）7（4―2、3―3）5 愛媛（新居浜ク）

東京（東京重機）19（13―2、6―2）4 福島（東北ムネカク）

鹿児島（鹿児島ク）22（13―5、9―3）8 富山（高岡女ク）

▽準々決勝

鹿児島 13（6―5、7―3）8 山口（徳山高OG）

熊本（大洋デパート）26（14―0、12―1）1 大阪

東京 15（8―4、7―7）11 三重（田村紡）

愛知（ブラザー工業）7（5―2、2―2）4 茨城（日本ビクター）

▽準決勝

熊本 10（4―6、6―1）7 東京

愛知 11（5―2、6―5）7 鹿児島

▽3位決定戦

東京 14（3―2、11―1）3 鹿児島

▽決勝

熊本 6（2―3、4―1）4 愛知

【愛知】	得		【熊本】	得
佐藤	0	GK	小原	0
井戸田	0	GK	森山	0
森	1	FP	垂水	2
藤浪	0	FP	米	0
熊谷	0	FP	加子崎	0
藤田	0	FP	釼	0
長塚	1	FP	島田	0
森本	0	FP	蔵田	1
原川	0	FP	植原	2
宮崎	0	FP	篠田	1
鳥居	2	FP	山下	0

6（4）7MT（1）4

一般男子（30チーム）

▽1回戦

静岡（清商ク）15（8―7、7―7）14 富山（氷見ク）

茨城（自衛隊勝田）19（10―4、9―5）9 岩手（盛岡商友会）

長崎（佐世保ク）17（9―9、8―6）15 兵庫（神戸製鋼）

高知（高知ク）22（13―5、9―3）8 福井（北陸電力）

鹿児島（海上自衛隊第1航空群）20（12―7、8―3）10 福島（岩瀬農OB）

広島（日新製鋼呉）26（11―15、15―5）20 奈良（添上ク）

三重（本田技研）11（7―1、4―3）4 神奈川（全神奈川）

青森（青森ク）19（14―7、5―7）14 大分（昭電ク）

石川（金沢市役所）16（6―12、10―2）14 京都（全京都ク）

愛媛（住友化学菊本）20（13―4、7―4）8 山梨（塩山ク）

愛知（大同製鋼）30（13―10、17―4）14 栃木（AOK栃木）

和歌山（丸善石油下津）22（12―7、10―5）12 宮城（古川工OB）

山口（徳山ク）15（5―4、10―3）7 熊本（熊城会）

三重、広島を突き放す

▽2回戦

大阪（湧永薬品）31（18―6、13―1）7 静岡

長崎 29（15―10、14―8）18 茨城

鹿児島 25（15―8、10―8）16 高知

三重 27（11―6、16―8）14 広島

埼玉（大崎電気）34（18―4、16―5）9 青森

愛媛 30（17―4、13―5）9 石川

愛知 29（16―7、13―4）11 和歌山

東京（三景）19（10―2、9―3）5 山口

善戦の長崎、鹿児島力つく

実業団主力の4強進出

▽準々決勝

大阪 30（15―4、15―7）11 長崎

三重 33（19―5、14―5）10 鹿児島

埼玉 16（6―1、10―7）8 愛媛

愛知 25（16―4、9―3）7 東京

大阪（湧永）、埼玉（大崎）勝つ

▽準決勝

埼玉 21（10―8、11―5）13 愛知

大阪 18（7―10、11―3）13 三重

〝無資格〟気づき除外の珍事

○……オリンピック代表8人の登場、地元勢の大活躍、連日詰めかけた多数の観衆――太陽国体は盛りあがったムードのうちに進められたが大会3日目思わぬつまづきをみせ、一般男子の一選手が〝除外〟されるという国体ハンドボール史上初のトラブルがおきた。

○……問題の発端は、東海ブロック予選(8月・名古屋)に欠場した愛知・大同製鋼のFP松原光三選手の参加資格が問われたことにあった。

国体総則(5)参加資格の6項には「特に定められる者のほか、都道府県予選(地区予選会を含む)を通過した者であること。以下略」とあり、日本協会はこの線に沿って本大会の出場選手は必ず都道府県予選、ブロック予選に参加することを義務づけていた。

○……日本協会事務局と総務企画部では大会前、各チームの名簿とブロック予選の選手名簿(プログラム)を照合、チェックしているが松原選手は東海予選の名簿に明記されておりなんの疑いもなくパス、代表者会議(10月21日隼人町)でもクレームはつかなかった。

○……ところが実際は、同選手は東海予選直前、負傷のため入院、同予選への出場をあきらめ他の選手と代替されていたのだ

この時点で松原選手は本大会への参加資格を失ったわけなのだが、東海協会が書き替えを怠ったプログラムを日本協会へ送ったため見すごされ、一方、東海予選での変更が認められた、とうけとっていた大同製鋼は本大会登録前、全治した松原選手の戦列復帰の可否を「愛知協会へ念のため確かめた」(野田清選手兼監督代行の話)うえで手続きをとった。

○……大会3日目になって同選手の東海予選欠場に気づいたチームなどからアピールがあり、荒川理事長、安藤、嶋田常務理事らの調査で〝無資格〟が明きらかとなった。しかし、公式的な事務処理はすべて松原選手の出場を「承認」していたいきさつがからみ、即時ペナルティ(没収試合)を課すには踏み切れず、日本協会は苦しい立ち場に立たされた。松原選手を〝有資格〟として強引に押し切るか、没収試合かの二つに一つしかなかったわけだが、急きょ招集された理事会は、町をあげて大会の成功を期待している隼人町への配慮からもこれ以上トラブルを拡げない方向で事態を収拾することとし25日深夜「愛知の試合は没収しない。ただし準決勝以降の試合には松原選手の登録を除外する」という異例の決定を行った。

○……これに対しあくまで愛知の失格を強調するチームもあったが、結局この場は日本協会の姿勢を了解する形でおさまり、4日目以降の競技は予定どおり進められた。

国体の登録については毎年のように大なり小なり問題がおきていたが本大会でのトラブルは初めて。

○……実父の葬儀を切りあげてかけつけた松原選手にはなんとも気の毒であったし、万全の手配をしながらよそで起った一つの歯車の違いに自チームがミスをおかしたようにみられた大同製鋼も〝被害者〟といえた。

なお、全国大会で競技規則違反以外の反則に問われたのは37年の第14回全日本総合(下松市)で芝浦工大(東京)が他チームから予選に出た選手を登録、大会2日目に失格(没収試合)させられたケースがある。(杉)

▽3位決定戦

愛知 23 (14−9 / 9−5) 14 三重

▽決勝

大阪 14 (9−7 / 5−4) 11 埼玉

【埼玉】

	選手	得
GK	下里	0
	岩下	0
FP	近森	4
	飯田	4
	旗野	0
	東	1
	谷口	0
	佐藤	2
	林	0
	沢田	0
	荒井	0

【大阪】

	選手	得
GK	今井	0
	杉野	0
FP	市原	1
	木野	4
	早川	1
	森	2
	高橋	2
	戸田	4
	田中	0
	藤井	0
	菅	0

14 (1) 7MT (3) 11

天皇杯は地元鹿児島に

◇天皇杯(男女総合)順位①鹿児島(初優勝)②熊本③埼玉・愛知⑤大阪⑥宮城⑦山口⑧福岡

◇皇后杯(女子総合)順位①熊本(3年連続7度目)②鹿児島③愛知④東京・香川⑥宮城⑦大阪・三重・山口・茨城・沖縄・広島・北海道・兵庫

大洋の全国大会連続優勝記録16に

昭和43年8月の第23回全日本総合選手権大会以来全国大会連続優勝を続けている大洋デパートはこの大会にも優勝し、連続記録を16にのばした。この間の勝率は64戦62勝2敗という抜群の成績、全国大会36連勝を続けている。

釜山旅客自動車が来日

～17日から日韓社会人～

湧永薬品らと5試合

日本協会と全日本実連は11月17日から韓国社会人ナンバー・ワン釜山旅客自動車を招いて「第2回日韓男子社会人交流」全5戦を行うと発表した。

釜山旅客自動車は李（康）団長（釜山協会々長）ら役員4、選手13名、日本側は各地とも有力実業団が単独で対戦。韓国から社会人チームが来日するのは初めて。

釜山旅客自動車は2年前に第1回交流で訪韓した愛媛クを12－10で破っている。

【日程】▽11月17日18時30分　対湧永薬品（大阪市中央体育館）▽18日16時　対本田技研（四日市市体育館）▽22日17時　対新日本製鉄名古屋（東海市新日鉄体育館）▽23日19時　対セントラル自動車（横浜・平沼記念体育館）▽25日19時　対三景（東京体育館）

【来日メンバー】▽団長　李康竜（釜山協会々長）▽監督　成達変▽総務　劉彰熙▽コーチ兼GK　張裕文▽選手GK　姜正炫▽FP　金広錫、朴泳甲、康忠根、金奉謙金甲経、李正陽、金名顕、曺基植李正魯、金相魯、黄鐘秀、他に韓国協会が随行役員1名。

FAギョッピンゲンが来日

日本協会はこのほど来春4月西ドイツの強豪・FAギョッピンゲン（男子一九七二年度優勝）が来日、3試合を行うと発表した。

同チームは、かつての名手L・ケンパ（31年来日）が率いる名門で今冬の全国リーグの覇者。

ミューラー、エップル、ブシェルエイゼルら超一流の攻撃者を持つ日本側の対戦チームなどは未定

大洋デパートなど決まる

全日本総合出場チーム

12月6日から5日間東京体育館で行われる第24回全日本総合選手権出場チーム（男16、女12）は各加盟団体、関係協会からの推せんを受けつけているが、これまでに発表されたチームは次のとおり。

（＝発表順）

なお、高体連女子は辞退、そのワクを学連にまわした。

【男子】▽日本協会推せん、大崎電気（埼玉・前回優勝）、湧永薬品（大阪）

▽全日本実連推せん　大同製鋼（愛知）、三景（東京）、本田技研鈴鹿（三重）

▽全国高体連推せん　中央大附属高（東京）

▽全日本教職連推せん　大阪イーグルス（大阪）、スワロー兵庫。

▽全日本自衛隊連推せん、海上自衛隊第一航空群（鹿児島）

【女子】▽日本協会推せん　日本ビクター（茨城・前回優勝）、ブラザー工業（愛知）

▽全日本実連推せん　大洋デパート（熊本）、東京重機工業（東京）、田村紡（三重）、大崎電気（埼玉）。

▽次年度国体開催地推せん　扇屋（千葉）

全日本学連代表は男女とも11月17日に決定。東京代表も11月中旬に決まる。

全国社会人代表男子2チームは函館有斗OB（北海道クラブ優勝）対三春台ク（関東クラブ優勝・神奈川）、蒲郡ク（東海クラブ優勝・愛知）対近畿クラブ優勝（11月上旬決定）の2試合を行なって決める。同女子は鹿児島国体に出場した5クラブから日本協会がチームを選考する。大会の組み合せは11月20日東京で行われる予定。

アルジェリアから招待

日本協会にこのほどアルジェリア協会から、今冬12月26日から1月4日まで同地で開く国際トーナメント（男子）の招待状が届いた。日本協会に外国協会の国際大会招待が寄せられたのは3年前のタシマイダン・カップ（ユーゴ）以来のことであり、日本協会では遠征条件などを問いなおし、態度を決める。

難航するクラブ対策

日本協会は10月の月例常務理事会で、懸案（総務企画部案）の「クラブの定義」について検討したが各理事からクラブの現状を掌握していない面があるとの指摘があり辛くも一部をブロッククラブ大会の参加基準案として残しただけで差し戻し同ようとなった。

いわゆるOB、OGによる「クラブ」に画一した線は引きにくく各クラブの多様さ、課題の多彩さは簡単に共通項を見つけ出せない

しかし、地方協会では、日本協会がクラブの定義づけを固めない限りクラブ大会を開くのは難しいという声も強く、執行部は〝決断〟を迫られている感じだ。

総務企画部では「定義」の再検討を進める一方、来春2月の全国会議に一般男女の新しい登録制度を提案しこの面からクラブを種別する方法を考りようとすることにする模様。

なお、来年度もクラブの全国大会の開催計画はなく、ブロッククラブ大会を促進させる方針が決まっている。

指導体系の一本化も目指す

普及部、講習会を積極化

日本協会普及部は7月以降全国委員会、中央（本部）委員会を計4回にわたって開き、今後の普及活動について協議を重ねてきたがこのほど基本的な姿勢を打ち出した

それによると、本部―ブロック―各都道府県のタテの線を基幹に指導講習会を活発化させ、初心指導者や競技人口（底辺）の拡大を企るため、まず早急にブロック講習会委員によって各ブロック講習会を開くことになった。

各講習会はいずれも先に刊行した「日本協会・テキストブック」を使用して進められる予定で、指導体系の一本化へ最初のステップを踏み出したのは大いに注目してよい。

また「日本協会公認指導員」（仮称）については「公認審判員」の採用している階級制（ライセンス）と同ようのシステムを研究することになった。

このほか、同部では最近にわかに論議が集められている国体一般男女の参加資格などの検討も行っており、50年度から19才をラインとした年令別（成年男女と少年男女の4部）に改組されるまでに意見をまとめあげ日本協会へ上申する。

大同製鋼、初の全国優勝飾る

～第13回全日本実業団・男子～

伯仲の実力、6試合が引き分け

第13回全日本実業団男子選手権（日本男子実業団リーグ）は9月27日から10月1日までの5日間、名古屋市体育館に全国最上位にある8チームが参加して行われた。

実力伯仲の予想どおり連日もつれた試合が相次ぎ、特にベストフォアによる決勝リーグは6試合のうち4試合が引き分けというかつてない激戦となり、得失点差の争いから大同製鋼（愛知）が大崎電気（埼玉）の連勝を阻んで初優勝した。大同製鋼は初の全日本タイトル獲得である。

本田技研、善戦及ばず

◇予選リーグA組

大崎電気（埼玉）	19	（11－8 8－8）	16	本田技研（三重）
湧永薬品（大阪）	26	（9－6 17－9）	15	三菱レイヨン大竹（広島）
大崎電気	33	（16－6 17－6）	12	三菱レイヨン大竹
湧永薬品	18	（8－3 10－8）	11	本田技研鈴鹿
本田技研鈴鹿	21	（9－8 12－7）	15	三菱レイヨン大竹

（この記録は順位リーグに適用）

大崎電気 12（7－6 5－6）12 湧永薬品
引き分け

（この記録は決勝リーグに適用）

得	【大崎】		【湧永】	得
0	下里	GK	今井	0
0	岩下	GK	国本	0
3	近森	FP	木野	6
7	飯田	FP	早川	1
1	旗野	FP	森	2
1	東	FP	高橋	1
0	谷口	FP	戸田	2
0	佐藤	FP	松井	0
0	荒井	FP	藤井	0
0	林	FP	市原	0
0	沢田	FP	菅	0
0	坂口	FP	田中	0
12	（2）	7MT	（1）	12

（審・鈴木 大橋）

○……優勝争いにひびくビッグカード大崎×湧永は昨冬の全日本総合の再現ともいえる力と力、技と技のぶつかりあいでファンをたんのうさせた。

大崎は1分東（全日本）のゲットで先行、飯田の活躍もあって優位に試合を進めたが、湧永は21分高橋で4－4、23分戸田で5－4と初めてリードした。このあと木野、飯田がそれぞれ2点づつをマーク、激しくもつれあったまま後半に入った。

○……大崎は後半8分7MTでタイ（7－7）とし40秒後旗野のゲットで再び先行に成功、12分7MTで追いつかれたものの13分飯田が決めて9－8。

このあとの攻防はまさにすさまじいという一語につき、湧永が16分森、17分戸田で10－9にすると大崎も19分飯田（オリンピック代表）20分7MT近森（オリンピック代表）ですかさず逆転、湧永は23分早川（オリンピック代表）で11－11と七たび同点とし、最後5分に勝負がかかった。

○……25分大崎は当り星・飯田が湧永のマークを振り切って貴重な勝ちこし点をあげたが、45秒後湧永も木野がゲット、遂に引き分けに終った。

互に手の内を知りあい、しかも対抗意識を露わにしたエキサイトゲームで、現代最高峰の顔合せといわれるにふさわしい内容だった。

○……本田技研の健闘も大会を盛りあげた。

試合運びにすっかり粘りがでてきた。大崎戦では後半開始と同時に一気に追いあげ5分には11－11とした。しかしそのあとわずかな乱れを大崎の旗野、佐藤（全日本）につかれ11－14とされたのが痛かった。

湧永戦は前半20分間無得点という貧攻がひびき、後半15分9－14としたのが精いっぱいだったが、チーム力向上をはっきり印象づけた。三菱レは夏場のスランプからは脱したようだが、試合かけひきとスピードで他チームに一歩をゆずり、失点しだすと踏みとどまる力がなく、本田戦でも後半16分まで14－15と粘りながら、そのあと5点をたてつづけに失うなどした。

大山、住友化学が健斗

◇同B組

三景（東京）	15	（6－9 9－5）	14	大山商会（大阪）
大同製鋼（愛知）	28	（15－5 13－11）	16	住友化学菊本（愛媛）
三景	16	（8－10 8－5）	15	住友化学菊本
大同製鋼	28	（13－7 15－4）	11	大山商会
大山商会	18	（8－6 10－6）	12	住友化学菊本

（この記録は順位リーグに適用）

大同製鋼 30（14－2 16－8）10 三景

（この記録は決勝リーグに適用）

得	【大同】		【三景】	得
0	柳川兄	GK	西牧	0
0	倉谷	GK	大井	0
6	野田	FP	宮田	3
5	藤中	FP	高梨	3
3	加藤	FP	内藤	1
5	中井	FP	植田	0
4	松原	FP	上平	1
0	石川	FP	池崎	0
0	小沢	FP	竹村	0
1	北村	FP	小林	1
2	守田	FP	吉本	1
4	柳川弟	FP	高森	0
30	（1）	7MT	（0）	10

（審・西川 河野）

○……大同の圧勝だった。どの試合も前半10分から20分までの10分間にたたみかけるような攻撃で主導権を握った。

中井（オリンピック代表）が一段とたくましくなったし、松原、柳川弟がすっかり安定して来たのは大きい。

三景は大山、住化に追いこまれながら、最後のところで巧妙に勝利を叫びこんだ。

大山戦では前半の劣勢をはね返し後半20分14—12と逆転しながら大山の食い下りにあって24分14—14とされたが、25分以後2本の7MTを吉本、内藤が決めて逃げこんだ。住化戦はもっと危かった。後半15分9—13とされ、あと1分で14—15となった時は勝負ありと見えたが29分2秒に吉本でタイ、タイムアップ寸前高梨（全日本）が劇的な決勝点をあげ逆転勝ちした住化にとってはあきらめきれぬ試合だろう。

○……大山×住化は予想どおりスタートは1点をめぐってせりあったが、中盤奥川、上田の活躍でリードを奪った大山が、後半開始直後、前島、奥川で10—6とさらに点差をあけて主導権を握り、そのままのペースで押し切った。

湧永、ついに3引分け
大同×大崎も勝負つかず

◇決勝リーグ

大同製鋼 13（8—4、5—9）13 大崎電気
引き分け

○……立ちあがりやや動きの固い大崎に比べ、大同は3分松原が先制ゴール、15分には5—2とリードした。

【大崎】	得		【大同】	得
下里	0	GK	柳川兄	0
岩下	0	GK		
近森	2	FP	野田	1
飯田	6	FP	藤中	4
旗野	0	FP	加藤	0
東	0	FP	中井	4
谷口	0	FP	松原	4
佐藤	3	FP	石川	0
荒井	0	FP	小沢	0
林	2	FP	北村	0
沢田	0	FP	守田	0
坂口	0	FP	柳川弟	0

（審・奥村、大橋）

13（0）7MT（3）13

その後、両軍ともチャンスをつかみながら相手GKの美技に阻まれたが、大同は終盤再び勢いにのり藤中の連続ゴールと7MTなどで4点差をつけた。

○……後半、大崎は飯田の強引なロングシュートを中心にじりじりと追いあげ、21分近森のロングで11—11。

大同は25分藤中、大崎は27分飯田のゲットで互角、29分30秒大崎は佐藤がサイドから決めて13—12とし勝ちを握ったと思われたが、大同はタイムアップ直前、松原が起死回生の一打を放って辛くも引き分けにもちこんだ。

三景、大魚を逸す

湧永薬品 11（4—5、7—6）11 三景
引き分け

【三景】	得		【湧永】	得
西牧	0	GK	今井	0
大井	0	GK		
植田	0	FP	森	1
上平	1	FP	戸田	0
吉本	1	FP	木野	5
喜田	3	FP	早川	1
内藤	2	FP	田中	2
高梨	3	FP	市原	0
池川	1	FP	松井	0
高森	0	FP	藤井	2
小林	0	FP	菅	0
竹村	0	FP	杉野	0

（審・吉川、西川）

11（1）7MT（1）11

○……三景はまったく惜しい星を逃がした。立ちあがりいきなり0—3とされたが10分吉本のゲットを口火に高梨の巧技で同点とし、さらに前半終了まぎわ7MT（喜田）、内藤で逆転した。

湧永は後半10分6—5としたが守りに粘りがなく、攻撃も木野（オリンピック代表）に頼るだけ。15分には8—7と三景が再びリードそのペースを守って26分には11—8と開いた。

こうなっては湧永も苦しいとみられたが、26分10秒木野、27分藤井で追いこみ、29分20秒の7MTを藤井が決めて引き分けた。三景の健闘が賞される。

大崎電気 23（12—7、11—10）17 三景

【三景】	得		【大崎】	得
西牧	0	GK	岩下	0
大井	0	GK	下里	0
竹村	0	FP	荒井	6
喜田	7	FP	近森	5
高梨	5	FP	谷口	0
内藤	2	FP	東	3
上平	2	FP	旗野	0
池崎	0	FP	佐藤	2
吉本	0	FP	沢田	1
高森	0	FP	前渕	0
		FP	坂口	0
		FP	林	6

（審・西川、吉田）

17（4）7MT（3）23

○……大崎はポイントゲッター飯田を欠き苦しい試合ぶりで後半15分には15—16と逆転された。しかし、そのあとは近森の突進と持ちまえの勝負強さで得点。三景は喜田、高梨らで粘ったが及ばなかった。

全日本実業団男子勝敗表

【決勝リーグ】

	同	崎	湧	三	P	勝	分	負	得	失
①大同製鋼	…	△	△	(○)	4	1	2	0	62	52
②大崎電気	△	…	(△)	○	4	1	2	0	48	42
③湧永薬品	△	(△)	…	△	3	0	3	0	42	42
④三景	(●)	●	△	…	1	0	1	2	38	64

【5〜8位決定リーグ】

	本	菱	住	大	P	勝	分	負	得	失
⑤本田技研	…	(○)	△	○	5	2	1	0	60	49
⑥三菱レ	(●)	…	△	○	3	1	1	1	54	50
⑦住化菊本	△	△	…	(●)	2	0	2	1	44	50
⑧大山商会	●	●	(○)	…	2	1	0	2	49	58

（ ）内は予選リーグの勝敗

（A組）【予選リーグA組】

	崎	湧	本	菱	P	勝	分	負	得	失
①大崎電気	…	△	○	○	5	2	1	0	64	40
②湧永薬品	△	…	○	○	5	2	1	0	56	38
③本田技研	●	●	…	○	2	1	0	2	48	52
④三菱レ	●	●	●	…	0	0	0	3	42	80

（B組）【予選リーグB組】

	同	三	大	住	P	勝	分	負	得	失
①大同製鋼	…	○	○	○	6	3	0	0	86	37
②三景	●	…	○	○	4	2	0	1	41	59
③大山商会	●	●	…	○	2	1	0	2	43	55
④住化菊本	●	●	●	…	0	0	0	3	43	62

実業団大会の観客席から

この大会、前文にもある通り、4試合が引き分け、また、5〜8位リーグでも、6試合のうち2試合が引き分けという、順位決定リーグでは、12試合のうち、半数の6試合が引き分けという前代未聞の大会となった。

これについては、正に実力伯中といって喜ぶ声もあるが、本当の意味の力がないのだという厳しい意見も聞かれる。

どうしても1点をとろう、どうしても守ろうという気構えがチーム全体にみなぎっていれば、こういう結果にはならない筈だ。引き分けでも良いやという安易な気持ちがあるからこそ、こういう結果になるのだという厳しい声だ。

互いに手のうちを知りつくした同士の争いだけに、ここ一つがなかなか決り難いということもあろうが、引き分けの形がマンネリ化すると、リーグ戦形式再検討の声もおころう。トーナメントの一発勝負では、より厳しさが増すのが当然だからである。

それと新しい形のチームの抬頭が望まれている。この大会でも、その崩芽は見えるが、今一歩新鋭チームが力をつけ、戦国時代がおとずれることを望む声がきかれた。

光る藤中のフェイント

大同製鋼 19（5－11、14－8）19 湧永薬品
引き分け

	【湧永】	得	【大同】	得
GK	今井	0	柳川兄	0
GK	国本	0	倉谷	0
FP	市原	3	野田	3
FP	木野	5	藤中	3
FP	早川	3	加藤	0
FP	森	4	中井	2
FP	高橋	2	松原	10
FP	戸田	2	石川	0
FP	松井	0	小沢	0
FP	藤井	0	北村	0
FP	菅	0	守田	0
FP	田中	0	柳川弟	1

（審・吉川、赤松）

19（3）7MT（1）19

○……大同の粘りはみごとだった。後半、大同は速攻を主体に懸命に反撃したが、14分過ぎで3また4点差まで追いあげるが、それ以上差が縮らない。だが、17分中井が7MTを決めてからペースが変った。藤中（全日本）の中央突破藤中－松原と渡るなどじりじりと攻めて1点差。このあとの25分ローリングから左45度でパスを受けた藤中がうまいフェイントをみせた。藤中は右の当っている松原にパスを出そうとする。湧永のガードはこの動きにひっかかって大きく動いた。これで藤中の前は一瞬あながあいた。待ってたとばかりに藤中のスピードのあるシュートが放たれる。湧永のディフェンスが左右からこのあなを埋めようとした時にはすでにボールはネットに突き刺さっていた。18－18の同点。

○……このあと1点リードを奪われたが終了42秒前、藤中が同じような動きで得点して引き分けた。

今度も藤中のフェイントに湧永が引っかかったといえるし、このフェイントが窮地の大同を救った

野田（オリンピック代表）中井がマークされることを予想、新進・松原と実力のある藤中に射たせた作戦が図にあたり、初優勝の因となった。（朝日新聞戦評を転載）

本田、混戦抜け出し5位

◇5～8位決定リーグ

本田技研 16（8－5、8－11）16 住友化学
引き分け

	【住化】	得	【本田】	得
GK	藤田	0	戸田	0
GK	城賀本	0	加藤勇	0
FP	原	1	勝田	2
FP	長嶺	0	佐藤	8
FP	伊藤	4	星野	1
FP	森谷	1	新実	1
FP	加藤	5	末岡	1
FP	曾我部	0	林	3
FP	落海	0	岩本	0
FP	白石	3	宮川	0
FP	金剛	2	三浦	0
FP	成行	0	加藤玉	0

（審・赤松、吉田）

16（5）7MT（2）16

三菱レイヨン大竹 23（13－8、10－5）13 大山商会

	【大山】	得	【三菱】	得
GK	川原	0	藤本	0
GK	越智	0	中村	0
FP	土田	5	田中	0
FP	奥川	1	松本	2
FP	前島	1	大江	9
FP	佐藤	0	池田	0
FP	伊藤	0	沖重	6
FP	山口	0	善本	2
FP	水谷	0	山川	4
FP	橋本	6	岩本	0
FP			岡村	0
FP			村本	0

（審・赤松、河野）

23（2）7MT（5）13

住友化学 16（9－7、7－9）16 三菱レイヨン大竹
引き分け

	【三菱】	得	【住化】	得
GK	中村	0	城賀本	0
GK	藤本	0	藤田	0
FP	山川	4	加藤	5
FP	大江	11	白石	3
FP	田中	0	金剛	0
FP	松本	1	伊藤	4
FP	沖重	0	落海	0
FP	池田	0	森谷	0
FP	岩本	0	長嶺	0
FP	善本	0	原	2
FP	岡村	0	曾我部	2
FP	村本	0	成行	0

（審・吉田、吉川）

16（0）7MT（5）16

本田技研 23（12－9、11－9）18 大山商会

	【大山】	得	【本田】	得
GK	川原	0	戸田	0
GK	越智	0	加藤勇	0
FP	土田	1	勝田	2
FP	奥川	1	佐藤	6
FP	前島	5	星野	1
FP	佐藤	6	新実	6
FP	伊藤	3	末岡	2
FP	山口	0	林	5
FP	水谷	1	岩本	0
FP	橋本	1	三浦	1
FP			宮川	0
FP			加藤玉	0

（審・河野、赤松）

23（4）7MT（0）18

ベスト・セブン決まる

全日本実連は大会終了後、この大会のベストセブンを次のように決め発表した。

▽GK　下里　敏彦（大崎電気）

▽FP　中井　武三（大同製鋼）
藤中　憲二（大同製鋼）
近森　克彦（大崎電気）
木野　実（湧永薬品）
佐藤　要二（本田技研）
大江　隆夫（三菱レ）

（選ばれた7選手はいずれもナショナルプレイヤー）

……歴代優勝チーム……

①昭35	大崎電気（11人制）
②	大崎電気
③	大崎電気
④	大崎電気
⑤	大崎電気
⑥	大崎電気
⑦	大崎電気
⑧	大崎電気
⑨	大崎電気
⑩	大崎電気
⑪	湧永薬品
⑫	大崎電気
⑬	大同製鋼

9年間の情熱実る　大同製鋼

□……大同製鋼（愛知）が初の全国タイトルを手にするまで実に9年間の道のりがあった。

社内の同好者を集めてチームを発足させたのは昭和38年、県内大会でも〝優勝〟とはあまり縁のない地味な存在だったが、その熱心さはその当時から関係者の間でも評判を集めていたものだ。

□……昭和43年頃から会社側がチームの育成に力を入れはじめ野田清、加藤友弘ら地元高校界から立教大へ進んだ名手を迎えて柱を造った。さらに45年から3年計画で全国制覇を目標に乗り出し藤中憲二、中井武三、柳川清ら学生、高校界の一流選手を加えた。

□……しかし大崎電気（埼玉）、湧永薬品（大阪）ら全国最上位をたえず無二の目標としてチーム造りをしている強豪との間には〝一歩〟の差があり全国優勝をなかなか掴めなかった。有力実業団チームには珍しい「苦吟時代」があったわけで、特に発足時からつい最近まで第一線にあった西村亮治、戸谷克蔵両氏の情熱は忘れることができない。

◇各地秋季学生リーグ戦記録

金沢工大、逆転で4連覇

北信越

◇10月14、15日◇富山大学体育館
◇参加6校

3校づつ2組に分かれた予選リーグでは、緒戦で前季2位の福井大が富山大に敗れ、優勝候補金沢工大も信州大の食い下りにあって苦戦するなど力の接近を示した。

結局、決勝は金沢工大と富山大の顔合せとなり、富山大が前半優位に立ったが、地力のある金沢工大は後半から立ちなおり一気に逆転、昨春以来4連勝を飾った。3位は福井大。

▽予選リーグA組

金沢工大 17（7—6、10—8）14 信州大
信州大 17（9—2、8—5）7 金沢美術工芸大
金沢工大 35（16—1、19—0）1 金沢美術工芸大

▽同B組

富山大 17（8—5、9—7）12 福井大
福井大 19（5—8、14—8）16 金沢大
富山大 21（5—4、16—7）11 金沢大

▽5・6位決定戦

金沢大 18（8—4、10—5）9 金沢美術工芸大

▽3・4位決定戦

福井大 15（9—5、6—3）8 信州大

▽優勝決定戦

金沢工大 17（7—9、10—4）13 富山大

中央、全勝で3度目

関東

◇10月3日〜21日◇1・2部駒沢屋内球技場、3・4部駒沢第1球技場。

男子は春季とまったく同じ経過をたどり、前半4日間を終って中央、日体、法政、早稲田が全勝で並んだ。法政×芝浦工大が後半はじめせりあった以外はほとんど一方的なスコアで白星をつみ重ね、4強の実力はまったく伯仲とみられた。

第5日からの星のつぶし合い。まず中央×早稲田は中央が後半4分10—5と開いて安全圏かとみられたが早稲田は5分以後すばらしい追いこみで20分には12—13とせまった。しかし中央はそのあと2点を加え振り切った。

つづく日体×法政は、後半26分11—13とされた法政が連続2ゴールしてタイ、引き分けの色が濃かったが日体はタイムアップ寸前喜井が決勝点をあげた。

第6日、中央が法政の反撃をかわしたあと、日体×早稲田は前半7度び同点から日体が2点をリード。早稲田も後半すぐ10—10とし再び激しい点の取り合いを演じた10分をすぎる頃から日体が僅かに先手をとって進んだが、早稲田も粘り28分19—20としスタンドを沸かせた。しかし日体はそのあと1分間に2ゴール、辛くも逃げこんだ。

この結果、優勝は4シーズン連続中央×日体の争いとなり最終日二千をこす観衆の歓声の中で対戦中央が攻防両面ですばらしい動きを見せ24—9と予想外の大差をつけ快勝、3連勝を決めた。日体が15点差で敗れたのは38年秋の芝浦工大戦（12—27）以来のこと。同校の関東学生（7人制）における大敗記録は39年秋東京教育大との10—28。

法政は4季連続3位、早稲田は4季連続4勝3敗。5位以下では明治が5年ぶりで5位にあがった。淋しかったのは芝浦工大が29年春1部昇格後初の6敗を記録したのと立教の2季連続テールエンド（14連敗）。

2部は予想どおり東京学芸大、国士館、日大のせりあいとなった。学芸大は慶応と引き分けて0・5差のハンデを負わされたが日大国士館戦を巧くのり切り、昨秋以来2度目の優勝を飾った。

3部、4部は雨天などで日程が延び、結局3部は一橋大4部は成蹊大、5部は駒沢大が勝った。（＝記録は次号）

なお得点王は1部が菊池悟（早大・盛岡一高出）2部が上野覚（国士館・聖光学園出）。上野選手は昨春、今春につづいて3度目の受賞。

▽1部

中央 20（12—2、8—4）6 立教
日体 25（9—3、16—6）9 明治
早稲田 13（4—3、9—3）6 東京教大
法政 17（10—4、7—10）14 芝浦工大
早稲田 16（5—4、11—5）9 芝浦工大
法政 17（6—4、11—3）7 東京教大
日体 20（12—7、8—4）11 立教



関東学生リーグ優勝をかけた中央一日体戦，中央の攻撃。

中央 20（11−5, 9−3）8 明治
日体 25（12−5, 13−4）9 東京教大
法政 25（12−4, 13−3）7 立教
中央 30（12−6, 18−7）13 芝浦工大
早稲田 28（21−5, 7−5）10 明治
中央 23（13−6, 10−5）11 東京教大
日体 20（12−4, 8−4）8 芝浦工大
早稲田 18（8−4, 10−4）8 立教
法政 23（15−3, 8−6）9 明治

明治 12（6−5, 6−2）7 芝浦工大
中央 15（9−8, 6−4）12 早稲田
日体 14（7−6, 7−7）13 法政

得	【日体】		【法政】	得
0	岸本	GK	佐藤	0
0	斉藤	GK	柴田	0
6	松岡	FP	吉野	1
4	浅原	FP	田上	1
0	藤田	FP	長谷川裕	4
1	古沢	FP	太田	0
0	小村	FP	川島	3
0	高野	FP	井手	2
0	河先	FP	柳	0
0	細江	FP	橋本	0
0	福井	FP	長谷川富	0
3	喜井	FP	村田	2
14（1）		7MT		（0）13

東京教大 20（10−5, 10−3）8 立教

芝浦工大 13（7−2, 6−4）6 立教

得	【芝浦】		【立教】	得
0	吉田	GK	伊藤	0
		GK	後藤	0
2	黒田	FP	片山	1
5	斉田	FP	菅間	2
1	新井川	FP	鈴木	0
0	安中	FP	松山	2
3	柳沢	FP	寺岡	1
1	柳原	FP	新井	0
1	押切	FP	荒木	0
0	古川	FP	川合	0
		FP	安井	0
13				（1）6

明治 11（6−5, 5−4）9 東京教大

得	【明治】		【東教】	得
0	有吉	GK	溝上	0
3	安倍	FP	中村	0
0	佐藤	FP	横島	5
3	相本	FP	新美	2
3	村重	FP	土井	1
0	指宿	FP	嶋田	1
2	山岡	FP	松尾	0
0	山根	FP	藪野	0
0	石井	FP	村松	0
11（2）		7MT		（0）9

中央 15（8−7, 7−5）12 法政

得	【中央】		【法政】	得
0	山田	GK	佐藤	0
0	吉近	GK		
3	佐々木	FP	吉野	0
2	花輪	FP	田上	1
3	白石	FP	長谷川裕	3
4	田中	FP	太田	0
3	山村	FP	川島	3
0	村田	FP	井手	2
0	今関	FP	村田	3
0	松本	FP	柳	0
0	上村	FP	長谷川富	0
0	藤	FP	川村	0
15		7MT		（1）12

日体 22（12−12, 10−8）20 早稲田

	【早大】	得
GK	石橋	0
FP	加藤	5
FP	浦山	0
FP	伊谷	0
FP	渡辺	1
FP	小松原	0
FP	田中	1
FP	菊地	7
FP	脇若	1
FP	川畑	5
FP	山高	0
7MT	（4）	20

得	【日体】
0	斉藤
0	岸本
7	松岡
3	浅原
2	喜井
10	小林
0	藤田
0	古沢
0	高野
0	河先
0	細江
0	福井
22（0）	

明治 20（11−7, 9−2）9 立教
東京教大 15（5−8, 10−6）14 芝浦工大
法政 17（8−7, 9−8）15 早稲田
中央 24（13−4, 11−5）9 日体

得	【中央】		【日体】	得
0	吉近	GK	斉藤	0
0	山田	GK	岸本	0
3	佐々木	FP	浅原	2
2	花輪	FP	松岡	3
5	村田	FP	小林	0
5	白石	FP	喜井	2
3	田中	FP	古沢	0
1	山村	FP	藤田	1
3	今関	FP	細江	0
0	会田	FP	河先	1
1	上村	FP	高野	0
1	松本	FP	福井	0
24（3）		7MT		（1）9

東京学芸大が2度目

▽2部

慶応 13（7−4, 6−9）13 東京学芸大

関東学生秋季（1部）

	中	日	法	早	明	教	芝	立	勝	分	負
①中央	…	○	○	○	○	○	○	○	7	0	0
②日体	●	…	○	○	○	○	○	○	6	0	1
③法政	●	●	…	○	○	○	○	○	5	0	2
④早稲田	●	●	●	…	○	○	○	○	4	0	3
⑤明治	●	●	●	●	…	○	○	○	3	0	4
⑥東教大	●	●	●	●	●	…	○	○	2	0	5
⑦芝工大	●	●	●	●	●	●	…	○	1	0	6
⑧立教	●	●	●	●	●	●	●	…	0	0	7

【2部順位】①東京学芸大6勝1分②国士館・日大5勝2敗④慶応3勝3敗1分⑤関東学院・明星3勝4敗⑦防衛大2勝5敗⑧千葉工大1勝6敗

		前半	後半		
国士館	21	10－9	11－10	19	明星
日大	14	9－6	5－4	10	関東学院
千葉工大	棄権				防衛大
国士館	15	8－7	7－7	14	慶応
日大	34	20－4	14－3	7	千葉工大
東京学芸大	13	5－6	8－6	12	明星
関東学院	棄権				防衛大
日大	15	7－4	8－2	6	慶応
国士館	40	24－7	16－7	14	千葉工大
明星	棄権				防衛大
東京学芸大	12	7－4	5－2	6	関東学院
日大	12	4－6	8－4	10	明星
東京学芸大	22	13－4	9－5	9	千葉工大
国士館	21	10－9	11－6	15	関東学院
防衛大	23	14－3	9－5	8	慶応
明星	18	5－7	13－6	13	千葉工大
東京学芸大	11	7－4	4－2	6	日大
慶応	18	10－8	8－5	13	関東学院
国士館	19	9－7	10－7	14	防衛大
関東学院	20	13－7	7－9	16	明星
慶応	20	10－5	10－6	11	千葉工大
東京学芸大	15	7－7	8－6	13	防衛大
日大	14	6－5	8－6	11	国士館
関東学院	19	11－7	8－5	12	千葉工大
慶応	17	8－6	9－7	13	明星
東京学芸大	20	14－5	6－5	10	国士館

	【国士】	得	【学芸】	得
GK	岡野	0	斉藤	0
FP	上野	4	青木	3
	代永	3	桶口	6
	石浜	0	金子	4
	中村	1	大高	0
	加藤	0	村田	1
	山田	2	梅原	0
	与那嶺	0	古屋	1
	長谷	0	内記	4
	中川	0	江成	0
	白石	0	阪部	1

20（4）7MT（1）10

		前半	後半		
防衛大	21	8－6	13－7	13	日大

女子は日体の堅城ゆるがず

関東（女子）

◇10月3～15日◇駒沢屋内球技場◇参加5校

各校とも不安定な試合ぶりのなかで、今シーズンも日体が厚い選手層にモノを言わせて全勝、36年秋リーグ復活以来23シーズン連続通算27度目の優勝を飾り、復活後87連勝（無敗）をマークした。

善戦が期待された東京教大は全試合を7人で戦い抜くというハンデを負っていたが岡田、畑中のコンビを軸に2位を確保したのは賞されよう。

3位以下では東女体大が立ちなおりのきっかけをつかみつつあるのと東京学芸大の成長が目についた。得点王は日体の赤塚千賀子（津女高出、4年）選手が15ゴールをあげて決まった。

		前半	後半		
日体	18	9－4	9－0	4	東京学芸大
東女体大	棄権				日女体大
東女体大	8	3－4	5－4	8	東京学芸大

（引き分け）

	【学芸】	得	【東女】	得
GK	大谷	0	増川	0
	高橋	0	前島	0
FP	長嶺	6	藤森	0
	初見	1	西田	3
	山元	0	木吉	1
	伊藤	0	石塚	0
	永沢	1	橘	3
	大野	0	赤岸	1
	河又	0	高橋	0
	斉藤	0	篠倉	0
	星野	0	宮城	0
	奈倉	0	我妻	0

8（1）7MT（2）8

		前半	後半		
日体	20	10－2	10－3	5	日女体大
東京教大	11	4－4	7－2	6	東京学芸大
東京教大	4	3－1	1－2	3	東女体大
東京学芸大	8	3－5	5－1	6	日女体大
東京教大	17	10－1	7－1	2	日女体大
日体	7	3－2	4－4	6	東女体大
日体	10	4－1	6－1	2	東京教大

	【東教】	得	【日体】	得
GK	松井	0	大工原	0
			長谷川	0
FP	岡田	0	嶋田	1
	畑中	2	赤塚	2
	橋本	0	小貫	2
	名賀	0	木村	2
	秋山	0	福田	1
	白鳥	0	八木	0
			岩本	2
			小林	0
			坂本	0
			鈴井	0

10（0）7MT（0）2

【順位】①日体4戦全勝②東京教育大3勝1敗③東女体大・東京学芸大1勝2敗1分⑤日女体大4敗

大阪体大、春秋優勝決る

関西（1部）

◇9月15日～10月8日◇大阪体大体育館ほか◇参加7校

42年春以後つづいていた6校制から7校制に改められた。新進・古豪の色分けがそのまま上、下位につながる展開となり、前季優勝の大阪体大がいちだんと安定感を増した攻守で、大阪経大戦、京都産大戦などを乗り切り全勝、2度目の優勝を飾った。

2位は大阪経大、3位はは2季ぶりに京都産大が入り、前季2位の同志社は4位へ下がった。

このほか関大、京大は1部確保がやっとの試合ぶり、名門関学は春につづいて1勝もマークできず最下位、リーグ戦後の入れ替え戦でも近畿大に敗れ来シーズンの2部落ちが確定的となった。

なお、今季から入れ替え戦は上

部下位2校と下部上位2校によって行われることに改められた。（2部以下の記録は次号）

大阪経大 25（13－1、12－1）2 関学
京都産大 17（8－5、9－6）11 京大
大阪体大 18（9－6、9－7）13 同志社
大阪体大 27（19－4、8－4）8 京大
同志社 23（11－6、12－7）13 関大
大阪経大 14（7－5、7－7）12 京都産大
大阪体大 19（11－6、8－3）9 関大
京大 25（14－3、11－8）11 関学
京都産大 19（9－9、10－5）14 同志社
大阪体大 12（8－4、4－5）9 大阪経大
京都産大 20（13－1、7－5）6 関学
関大 23（13－11、10－6）17 京大
大阪体大 16（6－5、10－5）10 京都産大
関大 23（13－7、10－3）10 関学
大阪経大 24（13－5、11－4）9 同志社
京都産大 16（10－3、6－5）8 関大
大阪経大 41（23－6、18－8）14 京大
同志社 24（13－5、11－4）9 関学
大阪体大 29（16－3、13－4）7 関学
同志社 23（13－7、10－6）13 京大
大阪経大 17（10－5、7－4）9 関大

【順位】①大阪体大6戦全勝②大阪経大5勝1敗③京都産業大4勝2敗④同志社3勝3敗⑤関西大2勝4敗⑥京大1勝5敗⑦関学6敗

▽1・2部入れ替え戦

京大（1部）14（7－8、7－3）11 桃山学院（2部）
近畿大（2部）19（13－8、6－5）13 関学（1部）

甲子園短大2連勝

関西（女子）

◇9月15日～10月8日◇桃山学院大ほか◇参加5校

甲子園短大、大阪体大の優勝争いと予想されていたが大阪体大は緒戦（対大阪薬科大）でエントリー・ミスをおかし試合を没収される大失態を演じつまづいてしまった。一方、甲子園短大は攻撃陣が快調で危気なく勝ち点をあげ、大体戦も後半あげた決勝点を守り切り全勝、2連勝、通算6度目の優勝を遂げた。2位には三校が2勝2敗の同率で並んだ。

甲子園短大 9（4－1、5－2）3 武庫川女大
大阪薬大 没収試合 大阪体大
甲子園短大 21（14－1、7－0）1 大阪薬大
大阪体大 26（14－2、12－1）3 大阪教大
武庫川女大 7（5－4、2－2）6 大阪薬大
甲子園短大 29（15－3、14－1）4 大阪教大
大阪体大 11（7－3、4－4）7 武庫川女大
大阪薬大 11（7－4、4－5）9 大阪教大
武庫川女大 9（4－2、5－2）4 大阪教大
甲子園短大 6（4－3、2－2）5 大阪体大

【順位】①甲子園短大4戦全勝②大阪体大・武庫川女大・大阪薬科大2勝2敗⑤大阪教大4敗

東北大が全勝優勝

東北・北海道学生

第17回東北・北海道学生秋季リーグ戦は10月13、14、15の3日間岩手大学体育館に10大学が参加して行われ、第1日の予選ラウンドで決勝リーグ進出の5校と、6～10位決定リーグにまわる5校が決められた。

決勝リーグはかつてない混戦模様となったが東北大が手固い試合運びで勝ち点を重ね全勝優勝を飾った。（詳報次号）

松山商大が勝つ

中四国学生

中四国学生秋季リーグ戦（第11回中四国学生選手権）は10月28、29日広島で行われ、1部（5校）は、松山商大と久々に活気をとりもどした広島商大がともに3勝1敗で並び、得失点差の争いから松山商大が2シーズンぶり6度目の優勝を飾った。選手権は第8回（昭44）以来これで4年連続。2部（6校）は香川大が初優勝。（詳報次号）

北大、4連勝遂げる

道学生、6大学リーグに

第4回北海道学生選手権は10月27日から3日間北見工大で初めて6大学が参加、北海道知事杯をかけて行われ道内各タイトルをもつ北海道大がバランスのとれた攻守で4連勝を飾った。（詳報次号）

立教ついに2部転落

東京学芸大1部入り果たす

◇関東学生各部入れ替え戦（10月24日・駒沢屋内球技場）

▽1・2部

東京学芸大（2部）14（8－4、6－4）8 立教（1部）

東京学芸大は昭32春加盟以来初の1部昇格。立教の2部転落は35年秋以来のこと、7人制になっては初めて。

▽2・3部

一橋（3部）19（7－11、12－6）17 千葉工大（2部）

▽3・4部

成蹊（4部）20－16 独協（3部）

▽4・5部

駒沢（5部）18－10 明治学院（4部）

完璧のフット・ワーク・合理化徹底シューズ

●袋状で快適な足ぞい、耐久性抜群。

●力のロス、横スベリ解消。



●金茶、ブルー、おしゃれなイメージ。





ハンドベアー デラックス〈HX〉

●サイズ=22.5~29●ブルー・金茶/¥1,700

神戸 **ベアー株式会社** 東京

千代田印刷機製造株式会社

東京都千代田区猿楽町1~5~18
TEL 03~292~2011 代

○支　社　　横　浜，千　葉，福　岡
○工　場　　立　川，九　州
○出張所　　大　阪，宇都宮

好評発売中!!

日本ハンドボール協会編 「ハンドボールテキスト」 ¥300.

お申しこみは日本ハンドボール協会普及部まで

成るか中央の初優勝

—全日本学生選手権展望—

追う日体・法政・大体大

第15回（女子第8回）全日本学生選手権は11月13日から17日までの5日間大阪市中央体育館に男子32、女子12校が参加してトーナメントで行われる。新しいナショナルチーム、ジュニア・ナショナル編成のうえで注目の大会だけに好内容を期待したい。組み合せをみながら有力校を探ってみよう。（編集部）

◆**男子** トップグループは中央、日体、法政、早稲田の関東上位勢大体大、大経大、京都産大の関西3強、それに中京(東海)、九州産大（九州）あたりだが、このうち中央、早稲田、大体大、大経大それにダークホース松山商大（中四国）がDゾーンに一かたまりとなってしまった。

優勝候補一番手にあげられている中央は関東3連覇を果たしたがこの大会では勝運に恵れていない。それだけに闘志は盛んなものがある。学生界から唯一人オリンピック代表に選ばれた佐々木と花輪（全日本）を軸とした白石、田中村田、今関、会田らの攻撃はスキがない。GKの山田、吉近も固い。攻守のバランスは随一といってよいだろう。

5連勝を狙う日体。インカレのタイトルだけは死守したいところ力の松岡、技の浅原（ともに全日本）を要に小林、喜井、藤田らの攻撃力はまずまずだが、守りの歯車がずれている。関東学生秋季では94失点（7試合）と低調だ。

法政の評判がいい。中央に12—15、日体に13—14。試合運びを考えれば両試合とも勝てた。長谷川田上、川島、井手、太田それに村田（明星高出）が新人ばなれした攻撃ぶりで大きな戦力となっている。

早稲田が往年の精彩をとりもどして来た。加藤、浦山、渡辺らに加えて菊地が大器の素質をようやく"本もの"にしはじめている。

関西勢では春秋全勝の大体大に期待がかかる。緒戦で早稲田、つづいて中央というのは苦しいが、ここさえ切り抜ければ初優勝を望める。中村、福永、中出、阪本、日柳、GK宍倉らでまとまっており頑張って欲しい。二季つづけて大体大に逆転負けした大経大は穂積を中心に力はあるが、最上位を狙うには物足りない。

地方勢の雄・中京は学生界ナンバー・ワンといわれるGK福井をもち、渡辺、夏目、梶村、小川、成田、新人・布垣（中京高）らで攻撃陣のスケールも大きい。軽視はできまい。

Bゾーンは芝浦工大をはじめ同志社、京大、東京教大、山口大、九州産大らが並んだが、どこも決定的な力に欠ける。

日体×甲子園、事実上の決勝 どうからむ中京、大体大

◆**女子** 2回戦の日体×大甲子園短大が事実上の決勝であろう。

この勝者に大体大がからみ、Bゾーンからは中京の進出とみるのが順当。

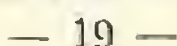
日体はNHK杯（6月・大阪）で田村紡を破り久々に実業団の一角を崩した自信が大きい。3年連続7度目の優勝の公算大だ。

しかし甲子園もすっかり安定しており勝算を抱いて臨むだろう。

破乱をおこすとすれば中京女、東京教大あたり。ダークホースは武庫川女大。

女子も国際的な舞台が数多く用意されており上昇機運の女子学生界もこの機をのがさずいっそう充実してもらいたいものである。





ミュンヘンオリンピックの"体験"と"反省"

～新しい頂点強化のために～



村田　弘
（日本協会常務理事
前・日本協会オリンピック対策部長）

◎オリンピックと勝利意欲

四年に一度開催のオリンピックは言わば各種目の選手権が同時に開催されているとも言える。そのスケールの大きさは又格別と言ってもよい。選手は自分の競技の上にオリンピックと言う大きな枠の中に入って何か異様なムードに包まれている。自分達の種目の成績と同時に自国の他の種目との成績意識と言う対抗意識があるので勝利意欲もまた違ったものがあった。

特にハンドボールが正式種目として始めて採用された今回のオリンピックは選手にとっても過去の選手が味わう事のできなかった素晴らしい幸運を掴んだといえる。この光栄を各試合に勝利意欲として発揮した事は言葉で言い現わせない何かはげしいものがあった。

四年に一度のオリンピックに選手として連続出場することは非常に条件がむづかしくなってくる、また二回連続出場できても最高のプレーが行えるかどうかは疑問である。今回の参加選手の70％は2年前の第7回世界選手権大会に出場した選手である。その意味からも次のモントリオールへ続いて出場できる選手はぐっと減ると思われる。毎回の遠征ごとに第一に言われることは選手の精神力の問題である。今回のオリンピックでもその事が感じさせられた。精神力根性と言うものは言葉で示されるものではなく、コートの上にこそ表現されるものである。日本選手も大いに勝利意欲を持って頑張っていたが、責任感と言うか悲壮感が先行して、実力を発揮しきれない感がある。鍛え抜いた練習の成果を十二分に発揮できるような神経の太い選手を数多く養成しなければならない。

◎選手層と体格体力差

この問題も毎回遠征ごとに痛感していることであるが、勝ち進んで行く為にはこの問題を解決しないことには道は開けないと思う。

ナショナル選手とこれに続く選手に断層があってはならない。強力国にはこの断層がないので厳しい選考を生き抜いて選ばれた選手は精神力も技術も抜群の選手である。

この点日本の選手層は薄く断層があり過ぎる。これを何とか埋める努力が先決問題であろう。

今回は選手の数が少なかったことも大いに戦力に影響した。選手に色々な負担がかかってきて、怪我をした場合にも選手数が少ない時にチームに及ぼす影響も大きく苦しんだ。他の国は16名で出場し各試合にその中から12名を出してくるので残り4名の選手は休養できる。日本選手は毎試合12名で出場したから休養どころか、疲労が重っていった。控え選手層が厚ければ非常に楽になってくる。日本チーム12名の中でも常時試合に出場しているプレーヤーと時々交替する選手の実力差があり過ぎて常時出場している選手の疲労度が極端に増した。どの試合にも12名が格差なく出場でき、特徴を生かしたプレーができればチーム体力の消耗も最少で済むと言える。日本チームは前半25分を過ぎると急に体力の消耗がはげしく落ちてくる。これも選手層の問題が大いに影響している。体力をつける事も問題だが選手の実力差をなくせば体力問題もよくなってくることは明らかである。

例えば、ルーマニアのグルイアー（32歳）は得点王（37点）になったがルーマニアのベンチは彼のシュートを活かす前に彼の体力を考えて攻撃だけに出場させ、防御の時速攻以外はすべて交替させると言う徹底した作戦をとった。彼も自分の持っている体力を攻撃だけに生かしたシュートを打ち、作戦に答えるべくシュートをし、責任を持ってゴールした。各国のはげしい選手交替に対し日本の選手交替の少ないことは残念であった。もっと交替ができるように選手間の実力差をなくして特徴づけたいものだ。

GKにしても各国は3名で相手国の攻撃シューターによって使い分けている。それだけ3名に特徴を持たせていた。

体格面でも日本の180 cm、74 kgに対しヨーロッパの平均は185 cm、83 kgと身長で5 cm、体重で10 kg違っている。これもプレー面に大きく影響してくる。小さい選手は駄目だと言う意味ではなく、小さくても技術の素晴らしい選手はいる。然し今後ヨーロッパ勢と立ち向うには体格面の事を解決していかねばならない。体力、体格からくるプレーの爆発力があらゆる時に差となって出たと言える。

選手層、体力、体格その他色々な点についてハンドボール協会は長期計画を立て、望まねばならない事を痛態した。

◎経験の重要性

国際試合というものは何と言っても経験と言うか場を踏まなければならない。この事は過去に於て物語られ、立証されてきた。日本は何と言っても条件が悪い。然しそれを克服しなければならない。

要するに数多くの国際試合を経験しない限り上位にくい込んで行く事は不可能である。いくら日本国内で強化練習をやっていても世界のレベル、リズムを掴まない限りは強化とは言えない。国際感覚を選手がまたチームが身につけることが重要なポイントである。今回優勝したユーゴは過去3年間数人のメンバー変更はあったにせよ殆んど変らずこのオリンピックを目指して何回となく国際試合を経験

してきた。ヨーロッパ勢は互いに対戦して相手を知り尽し、研究して本番での対戦に役立たせるのである。オリンピックで驚いたことはアメリカの進歩であった。これも彼等の過去2年間に於ける国際試合の賜物に他ならない。アメリカは2年前の世界選手権の時のメンバーは1人（GK）しか残っておらず、世界選手権終了と同時にオリンピックを目指して、体力体格の秀れた選手を集めナショナルチームを養成した。そして西ドイツよりケンパ氏をコーチに招き数回ヨーロッパに武者修業に行き、強豪と対戦してその実力を伸ばし国際試合を数多く経験したのである。2年前のアメリカはバスケットの中にハンドボールを取り入れていたが今回のチームは完全にハンドボールチームであり、その中にバスケットの良さを取り入れていた。日本チームはこの2年間ヨーロッパのナショナルチームとの交流が無かったため国際的感覚が掴めず、ただ想像だけでは実際に対戦した場合全くまごついてそのリズムについて行けない。ミュンヘンに乗りこんでから数ケ国の試合を計画していたが、各国とも自国で最後の調整をしてミュンヘンにはほとんどの国は数日前にしか着かず、結局アイスランド以外とは対戦できなかった事もつまづいた因とも言える。因みにアメリカはオリンピック前にヨーロッパを回りオリンピックにのぞんできた。


豪快なシュートを射つ得点王・グルイア（ルーマニア）

選手層、体格、体力のところでも言ったが、長期計画を立て、行く事、その中に国際試合を計画し早く交渉して万善を期さねばならない。少なくとも日本のナショナルチームは今後一年に一回は遠征し一～二回強豪を招待して年間に10～15試合以上の国際試合を経験することが急務である。この事をハンドボール関係者はよく理解し協力体勢を押し進めていきたい。

◎審　判

審判は競技運営の最高責任者として、厳格さと威厳を持って試合にのぞんでいた事に感心させられた。審判の良否がゲームを面白く立派にする事は決っている。二人のコンビネーションも実によく、適格な判定とそのタイミングの良さはうまく試合をリードし、判定規準も一定しているのでプレーヤーもプレーしやすい。

またゲームの運営者であって、反則をみつける裁判官でない事、それでいて反則を見逃がさずリズミカルにゲームを運営していた。特にオリンピックという国家意識を燃やして対戦している以上エキサイトした場面が多かったがそれに対する処置の早さと厳しさ、適格さは実に素晴らしかった。それもよくトレーニングし、ルールを勉強して、多くの国際試合を積んでいるからである。ここにも経験とトレーニングが必要とされている。審判技術の向上は技術向上に直結していることは百も承知している。その任にあたる審判員はトレーニングと研究、そして数多くの審判を経験して選手に負けないようやって貰いたい、それがひいてはハンドボールのレベルアップに通じるものである。

◎印象に残ったプレイヤー

GKでは何と言ってもユーゴのアルスラジャクで7Mスローの神様とも云える。またペネル（ルーマニア）本田も光っていた。

シューターは何と云っても左利きではシュートの職人とも云うべきグルイアー（ルーマニア）である。ルーマニアベンチは彼を攻撃一本に使いゴールをねらわせた。この5～6年間彼のシュートはヨーロッパの強豪を脅かし又勝利をもたらし、素晴らしい人気を集めてきた。右利きのラザレビッチ（ユーゴ）はどちらかと云うと野性的で破壊力を持っていた。

リードマンではガツ（ルーマニア）で、グルイアーをうまく使った。ポストマンはポポビック（ユーゴ）。ユーゴがあれだけの厚く幅広い攻撃力を持っていた事はこのポストプレーがあったからだ。

最も体の小さいプレーヤーとして野田選手が挙げられる。特徴を活かしたプレーは充分世界にも通じるのである。

（完）

代表選手リポート

“ミュンヘン”を回顧する（上）

考えなおすべき「日本の速攻」

木野　実

記念すべきオリンピックの第八戦ユーゴとの試合は八月三十日午後七時よりギョッピンゲンスポーツホールでで行われた。ギョッピンゲンはミュンヘンより汽車で二時間半のところにありオリンピック特別列車でD組ユーゴ、ハンガリー、アメリカの各選手といっしょに行った。体育館は日本にある板ではなくプラスチックの様なわりと弾力性のあるものだった。練習会場が同じ様なフロアで準備され十日間練習した慣れで心配なかった。六時に体育館につきすぐトレーニングという強行スケジュールであったが、日本ではちょっと考えられない。第一戦とあってニコリともしないユーゴの選手は我々以上に緊張している感がありありとうかがえた。ドイツという土地柄から当然観衆は日本の声援が大かろうという甘い、勝手な考えは裏切られた。というのも西独は労働力不足でユーゴからの出稼ぎが多く金メダル候補の人気は高く、日本人のおとなしい、スマートな声援では考えられないぐらいはげしいものでベンチとコート上の連絡が途絶えがちになるほどだった。ゲームでは一時間の緊張と集中力、そして声は絶やさないところに重点をおきゲームに臨んだ。

出足の好調を保てず

出足は好調で近森の7mスローで先取点GKの虚をついて浮かしたシュートで我々のペースですすめられたかにみえたがすぐエースラザレビッチに得意のコースを決められたことは痛かった。2年前の世界選手権ではベンチ要員の彼がここまで成長していることは考えもしなかったことであった。気の弱いラザレビッチの一本目を止められなかったことはゲームを苦しくしてしまった。結局彼には6ゴール許してしまったことからもあきらかである。ユーゴの攻撃はチームの動きがよくまとまり、ワンポストから広く深く攻撃するのが特徴である。サイドは欧州では珍しく小柄な選手がいて、右サイドは右利きのプレイヤーであった（欧州では左のポイントゲーターがいるケースが多い）。彼らの特色であり武器は脚力があり、そして何よりもジャンプ力があり空間プレーが出来ることであった。フローターの三人はロングが打て、体力もあった。ポストマンは機敏さとスピードの早さでは№1という定評をもちボールが入ればどこからでもシュート出来るポポビッチ（181㎝）という陣である。

多彩な人材とその攻守

ポストがダメならロング、上がダメなら下から攻めてくる無理のない理想的な攻撃は各ポジションに個性あるそして役割りを十分果す人がいることは強味であった。攻撃以上にユーゴのディフェンスには戸惑った。切り換えのうまさでちがったディフェンスシステムを敷くほど研究していた。ふりかえってみると全員よくやったと思う。一番相性のよいといっていたユーゴが優勝したのは何とも皮肉なことであったが、それだけの実力は十分あった。それというのもいろいろな場面を想定し、実践を積み重ねてきたときくし、現に我々はその策に対して何ら対抗出来ずに終ってしまった。豊富な試合経験とどこから攻められてもそれに対応出来得る策により揺るぎない自信をチームがもっていたと思われる。試合の結果からみると前半の終りと後半の始めの連取点をくい止められなかったのが悔やまれる。ユーゴーの「1・2・3ディフェンス」「6・0のディフェンス」そして片面を完全につぶしてボールの廻りをとめる粘りのあるつぶしに対して策がなく破ることが出来なかったのは反省される二年間の国際交流から遠のいていたことは相手選手のプレーを読むところまではいかなかった。

また我々のお家芸と言われた速攻であったが不発に終ったのは、根本から速攻に対する考えをあらためていかなくてはとつくづく感じた。

再考したい「速攻観」

GKからの球出し、カットして単独で走るケースをよく日本では速攻と言うが、これはお家芸ではなくあたり前のことなのである。得点源であっても効率の悪い速攻はお家芸ではないと思う。日本ではなんとか通用しても外国チームにボールをキープされ、DFで体力を消耗され神経を使い果してしまう。なんでもかんでもゴールに向かって苦しまぎれに打つシュートは考えもの。効率の高い確実なる速攻を身につけなくしてならないと思う。日本での国際親善の場合の速攻の得点ほどあてにならないものはないと思う。彼らは観光が主であり真剣さにはほど遠い。本番でみる彼らの素早さと真剣さは比較にならないほどきびしく、激しいものである。

では効率の高い確実なる速攻をするにはどうすればいいかということであるが、まず第一に相手チームのディフェンスの人数と位置をみることである。相手ディフェンスが早々と帰陣している場合は無理なパスを通して積極的な攻撃をしないことである。しかしスキをみつけることは大切なことである。次に全力で走ることはそれだけ視野が狭くなることであり、8分の力をもって走りボールをキャッチしたあと縦横に変化出来得る余裕とバランスが必要である。この二点を学んだ、この様に書けばそんなに走らなくてもよいじゃないかと錯覚されるかもしれないが得点差、時間経過を考えてつねに反撃出来うる能力を常に備えておく訓練は必要でありそのためにはもっと脚力とスピードをつけ、いろいろな場面を想定して実践にそくした練習が必要である。只速攻は武器ではなくあたり欧州の出足帰陣の早さは数段うまく進歩しているのを強く言いたい。なにげないところを完全にこなしているユーゴの強さを感じないわけにはいかない一戦であった。

（FP・主将、湧永薬品）

想像以上のハンガリー

早川清孝

2日前のユーゴ戦を終えて強烈に感じたのは〃オリンピック〃という場の異様なまでのムードであった。緊迫したその雰囲気は、あの世界選手権でさえも遠く及ばない。

36年ぶりというハンドボールマン待望の場であったことも拍車をかけていたが、それにしても圧倒されるものがあり、厳しいものであった。

日本がユーゴ、ハンガリー、アメリカと揃ったDゾーンに入った事は、願ってもない幸運であるという見方が自他ともに強かった。三ケ国共、四十四年あるいは四十五年において対戦経験があり、勝利を得たことなど考えれば、〃有利〃と感じたのは当然のことと言えよう。ユーゴスラビア、ハンガリー共に、四十五年の第七回世界選手権大会の時のメンバーよりあまり変動がなかったことも我々を勇気づけた。結果からすれば日本チームが組み易しと感じたその楽観が落し穴であったのではないかと思われる。

ハンガリーは日本チームの楽観した心を突くかのごとく、試合においては激しい闘志が感じられ、又新人らしく名前も顔も知らぬ選手に、意表をついたように試合開始早々たて続けに得点され、日本は完全に面喰い機先を制せられた中盤においても最初の動揺はかくしきれず、いつもの動作、切れ味が無く、攻撃、防御共に元気がないままに3点のハンデを負って前半終了。

ユーゴスラビア同様にハンガリーも若手選手の進境著しいことは目を見張らされるものがあり、日本が想像していたハンガリーの力とはけた違い、二年前と同じチームとは考えられぬ程であった。

後半に入っても前半同様に気力の張った迫力は、日本チームを圧倒し終始主導権はハンガリーのものであった。体力的に恵まれない日本チームは、防御がやっとと言った感じで、反撃の手がかりもつかめず、ハンガリーの堅い防御を突破する迄に至らなかった。

12―20という結果で終了した事は二年前の世界選手権大会よりハンガリーに数段の進歩が伺がわれ、又いかにオリンピックと言う大会に賭けた意気込みが激しかったかおわかりいただけることと思います。

それと共に今大会の目標であった第一戦のユーゴスラビア戦で敗れたためにチーム全体が意気消沈した感じであり、個々においては気力は充分あるように思えたが、チームの盛り上りに少々欠けた様に感じられた事は残念であった。

最後に日本チームがオリンピック初参加において経験したすべての事は、今後の日本ハンドボール界に一つとしておろそかにできぬ非常に大きな収獲であったものと思い、今回の〃経験〃をステップにして益々ハンドボールが発展していくものと確信致しております。

（FP・湧永薬品）

日本―ハンガリー戦
ランニングスコア

	【日本】	【ハンガリー】
1分		①
4分		②
5分		③
7分		④(7)
8分	①有永	
11分		⑤
11分15秒	②木野	
12分		⑥(7)
13分		⑦
16分	③野田	
18分		⑧
20分	④野田	
23分		⑨
26分		⑩
27分	⑤近森	
28分	⑥木野	
30分	⑦中井	
2分		⑪
3分	⑧近森	
5分		⑫
6分	⑨中井	
11分		⑬
12分		⑭
13分		⑮
15分	⑩木野	
17分		⑯
18分	⑪氷海	
22分	⑫近森	
23分		⑰
26分		⑱
28分		⑲
29分		⑳

・(7)は7MTを示す。
・この試合以外のランニングスコアは本誌前号既報

著るしいアメリカの進歩

飯田誠行

ミュンヘンオリンピックに対しその強化策は各国とも、目を見晴るものがありました。優勝したユーゴスラビアについては語るまでもありませんが各国のあいだで一番進歩した、と思われるのはアメリカでしょう。2年前、フランスに於ける世界選手権大会では、バスケットボールに毛のはえたぐらいのチームであったのが、今回のオリンピックにおける活躍は素晴らしいものがありました。まず第一に得点力、その攻撃策戦は2年前には見られなかったものばかりで特にアメリカンフットボールから採りいれたフォーメーション・プレーをマスターしているのはユニークでした。我々日本戦においてはこうしたプレーの多くは決まっていませんでしたが、第一戦の対ハンガリー戦で見せたフリースローからのコンビネーションには度ギモを抜かれ「アメリカも侮れない」と気持を引きしめなおしたものでした。黒人を含めてのスプリント力とボールをもってのボール・センスのよささから来るボール・キーピングの確実さ等を見ると次の東独における世界選手権大会での活躍は注目されるものがあり、すでに日本の敵ではなくなってしまっていると言う事も充分考えられるでしょう。フランスでの世界選手権から僅か2年の間にこれだけの成長をなし、これからの2年間の成長を考えただけでもごく近い将来ヨーロッパ勢の前に立ちはだかる可能性は充分です。アメリカ・チームが我々の属したD組で全敗したのは凡ミスの続出と、試合経験の浅さから来る勝負どころの見極めがまだ出来ていない事にありました。これらの諸点については、すでにドイツからコーチを招へいして、「ハンドボール」と言うものを教えこまれることによってすぐ是正されるでしょうし、彼らの国民性のなかにある「勝負をするなら、勝て!」と言うたくましい精神力がプラスされてその

チーム力は大変、恐ろしいものになる事は火を見るより明らかです。

ヨーロッパの一角を切り崩そうとしていた日本よりアメリカがその目標を先に遂げそうなことは残念ですが、日本も手をこまねいているばかりでなく、中国（おそらくいぜん強力でしょうから）を含めての国際トーナメント、例えば大平洋カップなる大会を設け、これらの国での交流をはかり、ヨーロッパにも積極的に武者修行するぐらいの対策は、当然必要になって来ると思います。

（FP・大崎電気）

ノルウェー強引さ増す

近森克彦

予選リーグで、ユーゴ、ハンガリに敗れた日本は、各グループ3位チームによる9〜12位決定戦に進むことになり、第一試合目、過去、チェコ、スウェーデンでの世界選手権で連続して勝星をあげているノルウェーと対戦した。ノルウェーは、過去のチームより一層の国際試合、練習で実力をつけ、銅メダルのルーマニア戦は14―18（前半10―11）と惜敗したものの西独戦は15―15で引分け、スペインに勝ちながら得失点差で惜しくも順位決定に進むという悲運に泣いていた。対ノルウェー戦は9月7日アラブゲリラテロ事件での24時間延期後の試合となり、ノルウェー選手は、イスラエル選手団の犠牲者への哀悼の意を表するとのことでベンチに入ったのは僅か九人（中心選手は全て出場していた）試合は左腕に喪章を付けたノルウェー選手の気持に合せる様に日本チームも「無気力」で始まった（選手自身は一生懸命プレーしていたが、周囲にはその様に見えたそうだ）。前半は僅か一点リードで後半に入ったが、前半と見違える様なノルウェーの積極的プレーに翻弄され連続得点され楽勝を許してしまった。ポストとサイドをついた攻撃は強引さだけのものだったが、体格、体力共劣る日本の弱点をつかれた為、防御することが出来なかった。又身長の大きい選手のサイドシュート、アンダシュートの多用にも惑わされた。

それにしてもこの一戦だけではないが、フランスでの世界選手権以来、ノルウェーはスウェーデンのほかの、欧州のナショナルチームとの対戦経験のなさが、これ程までに大きく影響しているとは思いもよらなかった。

オリンピックという大義名分のもとの各国の意欲は、日本のそれとは又違ったものを感じた。ノルウェーとは五年前に対戦しただけであって、対外試合の多いノルウェーは、精神的にも日本より上位にあったかもしれない。ポストプレー等の強引さがノルウェーの特徴とするものであったが、審判の解釈の違いで成功を許してしまったが、こういった判定はどちらがいいとのことでなく現時点での欧州の審判の基準を日本で適用して審判員諸氏の協力があってこそ、日本チームが海外での試合ノルウェー戦やその他の試合も乗り切れるのではないかと思う。ともかく今度対戦すればノルウェーには絶対に勝てると感じたのが試合が終っての感じでした。

（FP・コーチ兼任、大崎電気）

ヨーロッパのGK

本田洋

長身な体格を生かし、高く、そして横にジャンプするシューター腕の長さ、足の歩幅、彼らの持って生まれた体格を充分に生かし、最大限の動きを上に横に変化させる。ボールを握っている肩の可動性は、あくまでもディフェンスをかわす為のものであり、強力なクイックシュートを放つのは、しなやかな肘と手首である。この肘と手首が、日本とは違ったシュートタイミングを生む原因である。

シューターはディフェンスの瞬間の隙を見つけて優位な位置を求める。そして、優位な位置へ、クイックモーション、そして、そこから横に変化してのクイックシュートを放つ。長身の選手が、ジャンプしてから横に位置を変化させてシュートを打ってくる。これがミュンヘンでのシュートでした。

GKはシューターがシュートモーションに入るよりも速く、守りやすい位置をとり、シュートされる瞬間にボールに反応しようと構えなければならない。しかし、シューターがシュートモーションから二段、三段と位置を変化させてシュートを打ってくる時は、その位置を変化させて飛んでくるボールに対応出来る準備が出来ていなければ、受身の状態になり、不利な位置でシュートを迎えることになる。GKとしては非常に苦しい状態である。GKのポジションは単純であるが、位置を変化させてシュートしてくるシューターに対する動作反応は単純ではない。こ

れがGKの弱点になる。

今大会において、GK技術に較べてシュート技術は、はるかに進んでいた。10メートル以上の遠い距離から高くジャンプし、そして空間で横に移動するシューター。ディフェンスを三人もかわしてシュートするという高さと横の移動を充分に使ったシュートが多くあった。シュートモーションに入ってから横に2メートル以上も移動した所からシュートしている。

シュートの際、高さと横の移動をさせ、二段、三段と位置を変化させるシューターに対して、常に先手をとり、最適な位置をとることの出来るフットワークこそ、GKの理想であると言えます。また防御者については、相手の体格と運動能力を一見して、間合いを見抜ける能力と、それに適う激しいフットワークが出来る技術を持たなければならない。

創造力と努力こそ、世界に勝てる日本独自のハンドボールを打ち出す力と確信し、盛々の精進を誓います。（GK・大阪イーグルス初芝高教員）

上位8国のGK（本誌調べ）

	年令	身長(cm)	体重(kg)
【ユーゴ】			
ジブコビク	(27)	180.	82
アルスラナジク	(30)	189.	93
ゾルコ	(22)	186.	77
【チェコ】			
クラリク	(28)	186.	91
ポスピシリ	(28)	180.	80
スカルバン	(29)	175.	80
【ルーマニア】			
ペ　ヌ	(26)	191.	85
ディンカ	(27)	182.	82
タルレ	(21)	183.	85
【東ドイツ】			
フリエスケ	(32)	184.	87
ベイス	(28)	192.	95
ボワツ	(22)	183.	78
【ソビエト】			
セメノフ	(32)	184.	84
イスチェンコ	(22)	189.	87
ウィルスン	(28)	188.	85
【西ドイツ】			
ボーデ	(31)	177.	79
カーター	(24)	186.	75
ラスエン	(29)	183.	88
【スウェーデン】			
カールソン	(24)	184.	76
S・オルソン	(28)	182.	74
ストリョーム	(25)	189.	77
【ハンガリー】			
ホルバス	(25)	185.	82
バルタロス	(24)	182.	80
スザボ	(27)	182.	75
【日　本】			
本田　洋	(25)	179.	78
下里　敏彦	(26)	184.	73

( )内は年令

感激の開会式 厳しゅくな閉会式

氷海正行

一九七二年、昭和四十七年、八月二十六日、空砲の鳴り渡るミュンヘンの青空の下で、第二十回オリンピック競技大会の開会式が挙行された。

参加百二十二カ国、選手約一万人と史上最大の規模で開催された今大会は、施設も万全に完備されすべての記録表示がコンピューターによる近代文明の最高の枠のものであった。

四年に一度という世界のスポーツの祭典だけに、集まった選手達も満面に微笑を浮べていたが、体からは闘志が満ちあふれていたようである。豪華な中にも厳粛なるパレードが軽快なリズムと共に始まり、いよいよ待ちわびていた選手入場である。ゲートをくぐりスタジアムに一歩足を踏み入れると八万人の観客からいっせいに歓呼の声と拍手が起った。そして観客席からは大小の日章旗がふられ、この瞬間何とも言えない感激がこみ上げた。行進に入るとこれから十一日間の競技に臨む、厳しさが誰からも感じられるようである。世界中のスポーツマンがこの日を目指して日夜練習を続ける中で、国代表として選出された人々であるから、名誉と自信とそして誇りを持っての行進である。

大観集の見守る中で、世界のスポーツを愛する人達が色とりどりのユニホームで入場行進を続け、そして、聖火台に火がともされ、開会式も大詰めを迎えた。

オリンピック史上初の女性宣誓者による選手宣誓が行なわれ、いよいよ二十一競技、百九十五種目におよぶ第二十回大会は幕をあけたのである。

アラブゲリラの襲撃事件で一日延期された、ミュンヘン・オリンピックは、9月11日夜、静かに閉会式を迎えた。閉会式は開会式の時に見られたあの豪華さと打って変り厳かなものであった。選手入場も各国とも、区別なく肩を組み行進をした。

各国の選手達の顔からは、勝敗にこだわることなく、無事全日程を終えたという安堵感さえ見られた。電光掲示板には「さようならミュンヘン」そして、「モントリオールで会おう」と電光文字が、あざやかに、写し出された。ここで閉会式は頂点に達し、一段と燃えあがった聖火も消えていった。ここに第二十回ミュンヘン・オリンピックは静かにその幕を閉じたのであります。

（FP・千葉教員ク、八千代高教員）

★1試合 退場12人　各国のオリンピックにかける執念はすさまじく、エキサイトしたプレーが連続。スウエーデン×ソビエト戦では両軍あわせて延12人（ソ7、ス5）が反則退場を課せられるという乱戦を演じた。

退場者を1人も出さなかった試合は全44試合中わずか3試合だけ

初めて欧州遠征して

佐々木　健一

〝ミュンヘン・オリンピック〟。この28日間私にとって限りない喜びと体験の毎日でありました。目に写る全ての物事が、初めてのせいかただ驚くばかりでした。私は大事を前にしてケガをしてしまい恥かしながら面目なく思っている次第です。チームの皆様に大変な迷惑を、お掛け致しました事も申し訳けなく思って居ります。上位入賞をもくろんだ初期の目標は達せられず終り、誠に残念に思いますが今回の〝苦い経験〟を次の機会に充分生かす事が先決問題と私は考えて居ります。

私は国際試合というものは昨年のアジア予選と日本で行なわれる外国チームの親善試合しか知りませんでした。ですからナショナルチームがそう簡単には負けるはずが無いと信じて居たのですが、いざ競技が始り戦ってみると、どこの国も必死になって来ます。闘志をむき出しと言う訳ではありませんが、プレーそのものに気力、緊張、執念が表われて居るのが良く解り、なおかつプレーには余裕が有ります。そして日本を上回る身長から放つロングシュートそれに合わせて動くポストマンの働き、パスがポストに通ると、ディフェンスが押さえて居てもシュートまで持って行く体力と技術は日本のプレーヤーには見かけられないテクニックでした。こうしたプレーが多用されるのは、日本の審判員とヨーロッパの審判感覚が異なる点にもあると思います。このプレーが相手の得点に大変結びつき、日本は苦しめられました。優勝したユーゴスラビアはひとりひとり個性が有り、その特徴をゲームの中に巧く生かして居り、そしてその特味が観客の目をみはらせます。ロングシューターのジャンプカ、また、サイドマンのたたみかける様な速攻、ポストマンの素晴らしい瞬間的なスピード等、これらのプレーが速いボール回しからくり出されるわけですが、少しも動きが止まると言う事は無く、常にスピィーディーなプレーをくりかえします。そして、疲れた選手をどんどん休ませ、何度となく交代します。ディフェンスは相手によって変える変則シフトで忠実に動きまさに守りながら攻めてくると言った感じです。個人個人の迫力、気力、その上に秀れたコンビが良きチームワークを作り出して居り良いディフェンスから良き攻撃が生まれると言う事を示している様でした。しかしディフェンスの反則が非常に多く、ボールを持って居る者へのつめや当りが強く、自由に攻撃はさせません。強いチームになるほどディフェンスの反則が多いと言えそうです。

私達も、今回の体験をこれから充分に分析して今以上の精進と努力を重ね、世界屈指の強国に成るべく頑張りたいと思います。

（FP・中央大学4年）

目のこえた本場の観衆

新実　俊夫

私にとって初めて外国で行ろ試合が、ミュンヘン・オリンピックであったせいか、見るもの、聞くものすべてが、期待していたよりも大きく驚きました。

華麗な開会式の入場行進、陰惨なアラブゲリラ事件、選手村での各国選手とのなごやかな交歓、静かに聖火が消えた閉会式など、思い出しても筆に尽きない思い出の中で、特にファンの熱狂ぶりも忘れる事の出来ない一つとして、今も鮮明に思い浮びます。

地元西ドイツをはじめヨーロッパの人達のハンドボールに対する知識度は話に聞いていた以上で日本でハンドボールに接する人々にとって想像出来ないものがあり、さすがに、ハンドボールの本場であると感心させられました。

試合場、観客席、練習場などの設備は、立派で、本当にドイツ人らしい合理的な、スキのない技術と運営方法を感じることができました。

予選リーグは、御承知のとおり地方の町が当てられ、最初の試合は、ミュンヘンから汽車で三時間ほど行った歴史の古いギョピンゲンという静かな町の体育館で行われ選手専用列車が駅に到着すると多くの人達が、手をふって出向えてくれました。

体育館は、ミュンヘンの競技場ほど大きくはありませんが、試合が始まる前に、子供、若者、老人に至るまで各層の人たち、それに十数人の日本人、ユーゴ人およそ150人などで観客席はうずまり、試合前から熱気がたちこめ、異様な雰囲気でした。

開始のフィッスルが鳴るやいなや体育館の中は拍手と観声の嵐の中で試合をやっているようで、ベンチから声は、ほとんど選手には聞えず、きたないプレーをしたり、審判が間違った判定をしたと思うと、猛烈なやじと、口笛・ラッパなどで批難しフィッスルの音が、きこえない時もしばしばありました。しかし、試合中の観声や怒号はすべてを通じてでなく、立派なマナーやすばらしいプレーをした時はその選手、プレーに対し賞賛の観声と拍手で、ほめたたえます。批難すべき時はヤジをとばし、賞賛すべき時は、拍手をもってする所など大観衆でも統一されている様で、印象的な光景でした。

こうしたムードはどの試合でも変ることなく見られました。決勝リーグ、順位決定戦は、ミュンヘンの一万二千人を収容できる競技場で行われましたが、器（うつわ）が非常に大きいせいか、予選リーグの試合とは、違ったムードで行なわれ、日本とアイスランドの試合にも一万人のお客様が入りました。

ファンは各国のスタープレイヤーを実によく知っています。メーンエベントと云われたユーゴ×ルーマニア戦などはトップスターがずらりと並んでいるだけに場内いっぱいにふくれあがった観衆は騒々しいばかりにプレイヤーの名前を叫び選手紹介の時など、館内がゆれるほどの大きな拍手で迎えます。本当にヨーロッパの人たちにとってハンドボールは、身近なスポーツとして愛されているようで日本も、一日も早く、このような

姿になって欲しいとつくづく感じました。
　なお、発表された数字によると最高観客数は最終日夜の部（決勝及び5位決定戦）の一万二千人でこのほか一万人が記録されたのはソビエト×チェコなど4試合、注目のユーゴ×ルーマニア戦は九千人ということで、最少はチェコ×アイスランドの千四百人でした。
　ところでこのオリンピックは、私にとって数々のことを教えてくれました。晴れの出場を機会に、ハンドボールマンとして誇りをもち、より一層国内においてハンドボールを盛んにするための一端をになう人間に育つよう、今後の人生を歩みたいと決意しています。

（FP・木田技研）

〃オリンピック村〃の生活

下里敏彦

　ミュンヘン空港からバスで約三十分。静かな街の郊外に我々を待つ選手村があった。
　その中は、いかにもドイツ人の構想らしい、整然とした道路、両脇の緑、そして、澄んだ空の青さに映える近代的な白い建物。〃公害日本〃から来た我々には、正に別天地の感である。競技終了後にはアパートに変わると云うこの建物の中で、百数ケ国、一万余人の選手、関係者が生活をして行くのである。広い村内には、数種のパイプが走り、赤は食堂、黄は郵便局、と、誰もが迷わず目的地に行けるよう工夫されている。また、地下にはバスが走り、自由に乗ることができたが、こない時などは待つようなことはせず、ヒッチハイクを楽しんだ。日本では余り見られない光景の一つである。
　中央広場には、卓球、ゴルフ、チェス、また、各国の代表的な作品を上映する映画館等、外国選手との交流を深めるための娯楽センターが設けられていた。レストランは、セルフサービスとその豊富な料理に、最初は戸惑い、珍らしさも手伝って、食べ過ぎた選手も少なくない。
　そして、各所で見られる人種、国境を超えたなごやかな交歓風景言葉の不自由も、スポーツと云う共通点を持った若者達には、障害に値しないようであった。
　平和と自由の楽園そのものである村内に、理想の世界の縮図を見る思いであった。
　しかしながら、あるべきでないパレスチナゲリラによるイスラエル選手惨殺は、やはり最大のショックであり、平和な村内を一瞬にして暗にしてしまった。自由に出入りできたゲートも、厳しい警戒体制がひかれ、昼夜をとわない私服警官の見廻りに、外出も鈍りがちになった。36年前の大会がヒットラーの軍威を誇示したことから、この大会はつとめて平和色、友好色が打ち出され、軍国調を遠のけていた努力も、選手村に装甲車が入り、軍隊のヘリコプターが飛来する事態となり、組織委の人々の胸中は察するに余りあるものがあった。悲劇に終ったこの事件後は、各選手とも沈うつな日々を過し、競技続行への批判も聞かれた。それでも無事競技が終了し帰国が近づくと、〃チェンジ・チェンジ〃の市が開かれ、多い時は二百人を越す人が集まり、記念にと、バッチ、ユニホーム、民芸品等が交換された。
　村内では、しばし〃チェンジ・チェンジ〃の流行語が横行した。

（GK・大崎電気工業）

おことわり　竹野コーチ、野田、中井、有永各選手のリポートは次号に掲載します。

ミュンヘンオリンピック全スコア

（△印は準決勝リーグにも適用）

▼予選リーグ

スウエーデン	13—13	ポーランド
ソビエト	12—12	デンマーク
東ドイツ	16—11	アイスランド
チェコ	25—7	チュニジア
ルーマニア	18—14	ノルウエー
西ドイツ	13—10	スペイン
ユーゴ	20—14	日　本
ハンガリー	28—15	アメリカ
ポーランド	11—8	デンマーク
△スウエーデン	11—11	ソビエト
東ドイツ	21—9	チュニジア
チェコ	19—19	アイスランド
ルーマニア	15—12	スペイン
西ドイツ	15—15	ノルウエー
ユーゴ	25—15	アメリカ
ハンガリー	20—12	日　本
ソビエト	17—11	ポーランド
スウエーデン	16—10	デンマーク
△東ドイツ	14—12	チエコ
アイスランド	27—16	チュニジア
ノルウエー	19—17	スペイン
△ルーマニア	13—11	西ドイツ
△ユーゴ	18—16	ハンガリー
日　本	20—16	アメリカ

▼13～16位決定戦予備戦

デンマーク	29—21	チュニジア
アメリカ	22—20	スペイン

▼9～12位決定戦予備戦

ノルウエー	19—17	日　本
ポーランド	20—17	アイスランド

▼準決勝リーグ

チェコ	15—12	スウエーデン
ソビエト	11—8	東ドイツ
ユーゴ	24—15	西ドイツ
ルーマニア	20—14	ハンガリー
東ドイツ	14—11	スウエーデン
チェコ	15—12	ソビエト
ユーゴ	14—13	ルーマニア
西ドイツ	17—14	ハンガリー

▼15，16位決定戦

スペイン	23—20	チュニジア

▼13，14位決定戦

デンマーク	19—18	アメリカ

▼11，12位決定戦

日　本	19—18	アイスランド

▼9，10位決定戦

ノルウエー	23—20	ポーランド

▼7，8位決定戦

スウエーデン	19—18	ハンガリー

▼5，6位決定戦

ソビエト	17—16	西ドイツ

▼3，4位決定戦

ルーマニア	19—16	東ドイツ

▼1，2位決定戦

ユーゴ	21—16	チェコ

（注）予選リーグ及び準決勝リーグは試合順に記載

パワーの差れき然

―ミュンヘンの反省―

技術調査委がまとめる

ミュンヘン・オリンピックを日本協会技術研究調査委員として観戦（自費渡欧）した神田清常務理事ら10委員はこのほど、ハンドボール競技の全般的な印象と日本チームの試合ぶりなどについてリポートをまとめあげた。要旨次のとおり。

◇

▽審判技術について レフェリーはルールに対して常に忠実に判定をくだし、信念と自信がうかがえた。ホイッスリングは、7MT、警告、退場の時に強く、方向指示などゼスチャアも大きく明確である。

▽判定解釈について ゴール前のフリースローは正しい位置からプレーさせ、不正の場合は厳しく、何回も違反も繰り返すと警告、退場。（規則書どおり）

警告、退場の〝判断〟は粗暴プレーに対して厳しく、レフェリーの判定へのアピールには即刻警告退場。ストーリングの基準は、攻撃の意志が無いとみた時はただちに反則として処理。

▽日本の試合ぶり ①体格、体力の違いがれき然で、特に外国選手は腕が太く、長くそして手が大きい。

このためパワーフルなスウィングによるシュートが放たれ、投げのリズムを崩さぬままスローしてくる。スウィングを補助するボディも頑強でバランスを乱すことはまずない。

これらの体格、体力的特色を実際のプレー時では、防禦を引き離すためのカットインが、体重を活かした力強い助走となり、シュートをより強烈にしている。

②日本選手は後半にスピードが目にみえて落ちる。筋持久力の違いではないか。

③ヨーロッパ各チームのプレーは個人技をベースとした力とスピードによるコンビネーションプレーである。

日本はコンビネーションをベースとしスピードを活かしたプレーだ。プレーの核になっているのはヨーロッパはシュート、日本はパスワークといえる。

④ディフェンスは各国ともボール保持者に対して激しく当たり攻撃的だ。日本はまだまだ消極的。

⑤日本は速攻に頼りすぎたためゴールスローのミスが多く出た。守備面ではGKが、外国の速い動きからくりだされるシュートへの不馴れが目についた。

⑥防御に重点をおいたためか守りに体力が費されすぎ速攻力が鈍った。

▽世界選手権及びオリンピックで勝つためにはどうすればよいか。

①選手の大型化＝平均身長188㎝まであげる。190㎝代を少なくとも3人つくる②体力づくり＝ジャンプ力、ダッシュ力を養い、パワー、持久力アップを企る。また、動きの速さ、変化、正確さを追求する必要がある。

③シュート力の向上 ディフェンスの2枚の壁をはずして射てるシュート力を身につけさせる。

④チームの理想像 速攻を武器にする徹底的に走ってプレーを行いスピードの変化を加えた連続攻撃を行う。この中に空間利用などの変化攻撃をおりこむ。守り＝ボールが相手に渡った瞬間が激しく守るディフェンス。オールコート（プレスディフェンス）を主体にすることも考えられてよい。

▽今後の課題 日本協会運営をすべて国際的視野でとらえ、競技面でも国際交流試合を活発化させるまたコーチの育成、長期的な展望で一貫した指導体制によるナショナルチームの編成が急務。また日本協会役員は創造力、決断、実行力などに秀れた少数精鋭で組織。特に会長推せん理事は広い分野から人材を選ぶ。

> ミュンヘンオリンピック日本協会技術研究調査委員＝神田清、片瀬喜代次、森田正英、藤田八郎、石切山稔治（以上日本協会理事）、北川勇喜、稲石三二（以上技術指導部委員）、山口毅、狩野幸介（以上普及委員）、山田稔（日本協会監事）

◇

このほか同リポートは6月時点での村田氏から竹野氏へのヘッドコーチ切り替えに疑問を投じているほか「敗因研究委員会」の設置を提唱している。（文責・編集部）

日ソ交流具体化へ

日本協会は、今後の頂点強化対策の一つとしてトップレベルにある東欧圏諸国との交流について検討を進めることになり、金メダル国ユーゴの招へい（本誌既報）のほか、日ソ交流を具体化させる。

同交流については、今夏8月の国際連盟総会時に日本協会・渡辺副会長とソビエト側が下打合せを行っており、両国協会でさらに煮つめたうえ、両国体協間の「交流計画」に加えてもらうよう働きかける。

「11位の教訓」（本誌前号）に想う

日本協会はミュンヘンのためにとりつづけていた頂点強化対策が11位に終ったことで、全く新しい出発と施策を余儀なくさせられたと思う。

今になって考えてみれば、この頂点強化対策が果して当を得ていたものかどうかも考え直さなければならない。

もしミュンヘンでメダルが獲得できたとしても、底辺の広いサッカーやバレーのようにすぐビッグスポーツに躍り出られたかどうかは疑問である。

それにはあらゆる人の理解を得られるような底辺を持つことが最大のカギといえる。全く好都合に中学の指導要領に採り入れられ、中学生大会も第一回が開催されたことでもあり、一気に全国の中学に普及させることが肝要である。

実業団の求人活動を利用してでも、強引に指導者講習をしてでも地方に広めるべきだし、また日本リーグ制を採用して地方で中学生に好ゲームを見せることも可能なことであろう。

男女の世界選手権・モントリオールもあるが、それ以上に普及に全力を尽すべきだと思う。

【名古屋・田中滋章・投稿】

170名のハンドボール少年集う
3期目迎えた「小学生教室」

名古屋

昭和45年にスタートした名古屋市の「愛知県小学生ハンドボール教室」も今年で3年目。年々盛況さを増し3期生（本年度）の参加児童数は170名とこれまで最高をマークしている。同教室指導員・林正信氏からのリポートを中心に現況を紹介してみよう。

□……「小学生にハンドボールを」名古屋市にはすでに20年近い「名古屋市小学校ハンドボール指導会」という名の小学校大会がある

底辺の拡大こそ斯界発展の唯一の道であることを愛知球界ほどみごとに示している地方はない。

愛知がハンドボール王国と呼ばれるのも、単に強豪チーム、優秀選手が相次いで輩出しただけではなく、底深く、幅広い底辺活動の実績がモノをいっているのだ。

「教室」が開かれたのも、時流にのったアイディアではなかった

ハンドボールの将来をじっくりみきわめた計画と情熱、それにこれまでの〝年少対策〟の伝統が重なりあって極めて堅実にスタートしたのである。スポーツ少年へ注ぐ愛情豊かな目ももち論見逃せない。

□……練習日。市内市外から白地に赤いたて線2本というスマートな制服ユニフォームを着た子どもたちが〝登校〟してくる。

指導にあたる先生にはなんともほほえましい、そしてたのもしい姿に映る。ささやかな活動ではあるが、伝え聞いた父兄にも関心が拡がり、ついに今年から2部に分けて教えなければならぬほどの生徒がふえた。

□……指導内容は3年生にはドッヂボールを中心としたボール運動からハンドボールの初歩的技能を4年生には初歩的技能からゲーム（チームプレー）に、5・6年生にはゲームを中心とした実戦的な技能というように決めている。

最初のうちボールを操れなかった児童も回を重ねるたびに、パスやキャッチも段々と上達、身のこなしもなめらかになってくる。

□……この教室へ通うようになってから「体育の授業にも意欲的に参加できるようになりました」という父兄が多い。ハンドボールは児童の運動能力を高め、意欲を増すのに絶好の教材であることが実証された、ともいえるだろう。

3年のキャリアは小学生ハンドボールの〝問題点〟も見つけ出している。例えば、

一、ゲーム中、身体接触を許すととても危険である。

一、ゴールエリア（6m）がやや広すぎるし、サイドラインもあと3～4mほど狭くするとよい。

一、使用球（サイズ）は教育1号では大きすぎるため、その下の教育0号が適当――といった具合だ

□……指導員は小・中・高校教員20名が3班に分かれ担当。1回6～7名という割りふりである。これだけのスタッフが揃うとどうにか一人々々の能力を見つけ伸ばす配慮ができ、父兄にも好評を得ている。しかし、日当はおろか、交通費も満足に支払えない状態だ。日曜日、手弁当で〝奉仕〟して下さる先生たちの苦労がこの教室を支えている一つの力である、といってよいだろう。

□……会費が年額千五百円というのも父兄たちに評判である。

コートの提供など物心両面で協力を得ているブラザー工業と指導員の情熱があってはじめてはじき出せる額であろう。

野外活動として一泊のキャンプを毎夏採りいれているのも注目されよう。

今夏は三重県鈴鹿の朝明谷へ出かけたが、早くも子供たちから来年が待ち遠しい、という声がとんでいる。

楽しいプログラムをおりこみながらハンドボールの普及を着々と結実させているこの教室、将来は名古屋市以外の県内各地でも開設しようと関係者の意欲はますます盛んなものがある。

各地の記録

函館有斗OBが2連勝

第2回北海道クラブ選手権は9月2、3の両日室蘭工高球技場で行われ、男子は函館有斗OBが2連勝、女子も室蘭クが昨年につづいて快勝した。

▽男子準決勝（＝1回戦）

釧路白衛隊 15（7－7、8－6）13 函館工ク

函館有斗OB 22（12－6、10－4）10 室蘭ク

▽同決勝

函館有斗OB 22（11－5、11－5）10 釧路白衛隊

▽女子決勝

室蘭ク 24（13－4、11－2）6 函館商OG

東北ムネカタ、初の栄冠
男子は青森ク勝つ

第25回東北選手権は9月1日から3日間秋田県立体育館に男子6女子4チームが参加して開かれた

男子は決勝リーグ進出者を決める第1次ラウンドで有力とみられた盛岡商友会（岩手）が岩瀬農O

B（福島）に敗れる破乱があり優勝争いは混戦模様となったが青森クが巧みな試合ぶりで初の栄冠を飾った。青森代表の優勝は2年連続2度目。

女子は実力伯仲の4者がトーナメントで競い東北ムネカタ（福島）が2連勝を狙う全岩手と、地元全和洋（秋田）を連破、初優勝した。福島代表の優勝は17年ぶり3度目。実業団チームの優勝は第19回（昭41）の三菱鉛筆（当時山形）以来6年ぶりである。

▽男子第1ラウンド
青森ク 20（11－5，9－4）9 新庄ク（山形）
岩瀬農OB（福島） 12（7－5，5－5）10 盛岡商友会（岩手）
古川工OB（宮城） 24（8－5，16－7）12 大曲農ク（秋田）
▽同決勝リーグ
青森ク 23（10－8，13－7）15 岩瀬農OB
岩瀬農OB 15（8－6，7－5）11 古川工OB
青森ク 21（11－4，10－8）12 古川工OB
【順位】①青森ク②岩瀬農OB③古川工OB
▽女子準決勝（＝1回戦）
東北ムネカタ（福島） 10（3－3，7－2）5 全岩手
全和洋（秋田） 17（8－3，9－3）6 全涌谷（宮城）
▽同決勝
東北ムネカタ 8（4－0，4－2）2 全和洋

女子で浦添が初優勝

▼第9回沖縄高校選手権（9月・豊見城高）
▽男子準々決勝
興南 8－4 知念
沖縄工 16－14 豊見城
那覇 18－6 首里
真和志
▽同準決勝
興南 22－9 真和志
那覇 20－10 沖縄工
▽同決勝
興南 16（10－6，6－7）13 那覇
興南は4年ぶり3度目の優勝
▽女子準々決勝
首里 8－2 沖縄
浦添 12－4 那覇商
知念 10－3 糸満
興南 19－6 北山
▽同準決勝
興南 14－11 知念
浦添 14－3 首里
▽同決勝
浦添 7（3－4，4－1）5 興南
浦添は初優勝

本田技研、三菱油化破る

▼第23回三重県総合選手権（9月・津女高）
▽男子準々決勝
本田技研 27－7 三重教員
半田ク 21－14 津高
三菱油化 23－15 修球会
四日市工高B 18－5 津工高
▽同準決勝
本田技研 41－11 半田ク
三菱油化 14－9 四日市工高B
▽同決勝
本田技研 32（18－3，14－6）9 三菱油化
▽女子準々決勝
田村紡 27－2 暁ク
津女高 8－4 四日市高
暁高 22－2 津女OG
津女高3年 23－3 亀山高
▽同準決勝
田村紡 15－3 津女高
津女高3年 7－4 暁高
▽同決勝
田村紡 17（8－3，9－4）7 津女高3年

六郷、和洋女降し優勝

▼秋田県高校新人大会（10月・湯沢）
▽男子予選リーグA組①湯沢②羽後③大曲
▽同B組①秋田南②大曲農③横手
▽同決勝トーナメント1回戦
湯沢 17－1 大曲農
秋田南 16－9 羽後
▽同決勝
湯沢 17（8－2，9－4）6 秋田南
▽女子決勝リーグ
和洋女 12－4 大曲
六郷 12－5 大曲農
六郷 17－1 大曲
和洋 10－8 大曲農
大曲農 12－2 大曲
六郷 8－7 和洋女
【順位】①六郷②和洋女③大曲農④大曲

大商、初芝を破る 女子は大谷

▼第19回大阪私学総合体育大会ハンドボール競技（9月・大阪商）
▽男子決勝トーナメント1回戦
初芝 17－3 追手門
大商 11－8 桃山
▽同3位決定戦
桃山 16－9 追手門
▽同決勝
大商 9（4－2，5－1）3 初芝
▽女子3位決定戦
住吉学園 8－1 初芝
▽同決勝
大谷 6（2－0，4－4）4 東大阪

女子は青森西の好調つづく

▼第22回青森県高校秋季選手権（10月・鰺ケ沢高）
▽男子準々決勝
柏木農 10－7 青森商
七戸 16－9 五所
鰺ケ沢 13－11 三本木
青森 19－5 野辺地
▽同準決勝
柏木農 12－9 七戸
鰺ケ沢 9－7 青森
▽同決勝
鰺ケ沢 17（7－4，10－3）7 柏木農
▽女子1回戦（3試合）
柏木農 5－3 青森
三本木 不戦勝 鰺ケ沢
青森西 13－5 七戸
▽同準決勝
三本木 15－2 光星
青森西 9－2 柏木農
▽同決勝
青森西 5（3－1，2－1）2 三本木

添上が男女優勝

▼第25回奈良県高校総体ハンドボール（10月・添上高）
▽男子準々決勝
十津川B 19－7 奈良工
添上B 9－7 生駒
東大寺 11－9 添上A
郡山 17－7 十津川A
▽同準決勝
添上B 25－6 十津川B
東大寺 15－6 郡山
▽同決勝
添上B 13（7－4，6－4）8 東大寺
▽女子準々決勝
生駒 7－2 十津川
桜井商A 10－0 榛原
添上 9－4 郡山
一条 12－4 奈女短大付
▽同準決勝
生駒 7－5 一条
添上 10－3 桜井商A
▽同決勝
添上 9（4－2，5－5）7 生駒

読者投書欄・明日への提言

一般女子（国体）組み合せをめぐって

機関誌10月号国体展望によると一般女子でクラブと実業団を意識的に分け1回戦での対戦がさけられたようだ。歓迎すべきアイディアだと思う。

実業団とクラブの条件差は今にはじまったことではなく、以前から国体だけは実業団の出場を遠慮させたらどうかという意見があった。

むしろ思い切ってクラブはクラブ、実業団は実業団にゾーンを分けてしまってもよかったとさえ感じる。

国体の各競技はあまりにも順位争いに重きが置かれるため、強力実業団はその県の有力得点者として、クラブに道を譲ることなどとうてい現状では考えられない。

女子スポーツは欧米諸国と比べものにならぬほど一般生活への侵透がうすいと言われるが、国体という絶好の機会でさえOGクラブに開放されていないようでは空念仏はいつまでも脱せない。あえてクラブを意識し実業団同士をかみ合せた今回の日本協会の態度に拍手を送りたい

【静岡・TT生・自営】

機関誌前号による鹿児島国体の一般女子組み合せの際、クラブと実業団が色分けされたようなニュアンスの報道はいささか理解に苦しむ。

おそらくクラブに対する施策の立ち遅れをカバーしようとしたのだろうが、いかなる理由にせよ、厳正公平を原則とする組み合せに主観的な要素が入りこんだのはうなずけない。

国体の組み合せには大原則（基準）というようなものはないのだそうで「国民の健康増進と体力の向上をはかり、あわせて地方スポーツの振興と地方文化の発展に寄与する……」（国体趣旨）のであればよいわけだが、予選を経て駒を進めて来たからには各チームともそこに条件差などを考える必要はまったくないだろう。

日本協会がOGによるクラブへそこまでの配慮をするならもっと別の方法があるハズだ。

今回の措置を、クラブに対する関心の表れと一歩ゆずって考えても、大会の組み合せの一部に人為的な作用がされたことは印象を悪くする。【横浜・G】

編集後記

秋も深まってきましたいろいろなことのあった1972年ももう僅か2ケ月。1972年、一応斯界の情熱を傾けていたミュンヘンも期待値以下におわってしまい、この教訓を生かし、新しい出発をしなければならなくなりました。

〝ミュンヘンの道〟でもしばしば触れてきたところですが、期待が大きかっただけに……やはり今後の展望に対して路線の修整はしていかなければなりません。

本誌もミュンヘンへ大きく期待をふくらませるのに大きな一役を買っていたこと、今回の事態と従来編集部のとってきた論陣の方向に対して責任を痛感しています。今後やはり、地道な方向で努力を積み重ねていかなければなりません。

世界の最上位をめざすには、あまりにも多くのカベがあることを改めて思いしらされたのが、この大会ではなかったでしょうか。

昨年の世界女子の思わぬ成績、今回の男子、やはり地理的環境の差、つまりヨーロッパから遠いという我国の特殊条件、しかも財政的に豊かではない。このことをいかに解決していくか。

これに対する対策を数年先の目先のことと、数十年先を見通した長期的展望をたてていくことが現在の斯界にとって、もっとも重要な策ではないでしょうか。

数年先の展望としては、やはり各地で努力して、各国のナショナルチームを招き、できることならそこからあがる収入によって、ナショナルチームを渡欧させるというような形の強化策が考えられましょう。

それとともに十年、二十年先の見通しとしては、やはり、普及対策を第一にしていかなくてはならないことです。そして、現在プレーしている選手達の二世・三世を必ずハンドボール界にいれていくような形の施策をとっていかなくてはならないでしょう。全国の津々浦々にハンドボールのゴールが見られ、「ハンドボールというのは……」というような言葉を必要としないような事態にすることでしょう。

それとともに、東アジアに真の意味の好敵手を育てあげるべく努力をすることも必要でしょう。

東アジアの国々で世界選手権、オリンピックの決勝戦を行なう。これは夢ではないと思います。北西ヨーロッパから東ヨーロッパに中心が移ったのを更に東にもってこようではありませんか。

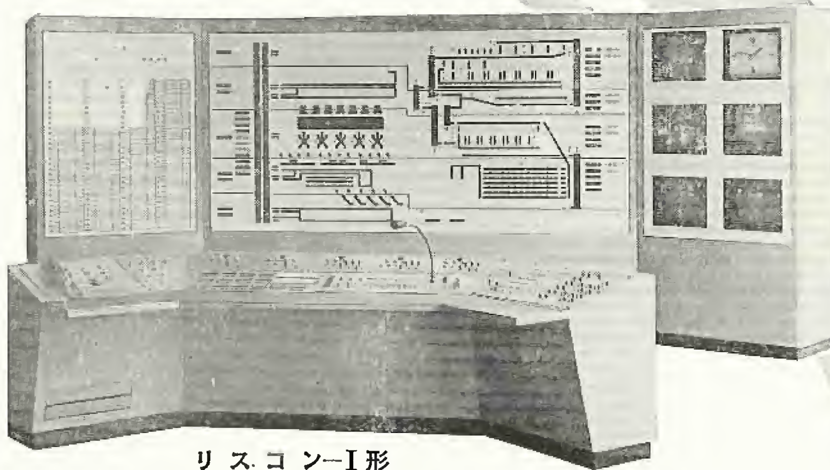
積極的・具体的・建設的な御意見をおよせください。

（藤本　強）

Osaki

営業品目

普通電力量計	電流制限器
精密電力量計	配線用しゃ断器
誘導形自動電圧調整器	配電盤・分電盤・制御器
静止形自動電圧調整器	試験用変圧器
配電線事故捜査器	各種開閉器・しゃ断器
需要電力量遠隔測定装置	数字式テレメーター・データロガー
電力需給用計器用変成器	標準用計器用変成器



リスコン―I形



大崎電氣工業株式會社

本社及び五反田工場	141	東京都品川区東五反田2の2の7 電信略号 シナガワ」デンキ	電話 (03)443−7171(大代表)
蒲田工場	144	東京都大田区多摩川2の8の1	電話 (03)759−6511(代表)
埼玉工場	354	埼玉県入間郡三芳町藤久保58	電話 (0492)58−1205(代表)

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一〇三号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
和四十七年一〇月二十五日印刷 発行所
和四十七年一一月 一 日発行 日本ハンドボール協会
東 谷区神南一ー一ー一
電 代表(467)三一一一
振替 京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価 二百円(年間購読料千八百円)